
白の星の誕生とその顛末について

十八

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白の星の誕生とその顛末について

【Nコード】

N4422S

【作者名】

十八

【あらすじ】

オブラートシリーズ（え？）

毎月15、30日更新予定

過分な力に凡人が振り回され、振り回された凡人が知らずいろんな物を踏み潰す……ただそれだけのお話。

勇者王新生！　ただし凡人？（前書き）

所謂オリ主転生モノのテンプレを強く意識していますので、そういったものが嫌いな方は読まないほうが無難かもしれません。
あらずじ通り、現在伏せてあるクロス先は蹂躪される予定です。

勇者王新生！　ただし凡人？

生前の俺は無神論者で、死んだら意識が拡散して世界に溶けて消えるんだろ？な、とか、そんな風に思っていた。

個人の信教を殊更否定するような馬鹿ではなかったつもりだけれど、狭量な一神教の類とインチキ臭い新興宗教は大嫌いで、弟夫婦が教会で結婚式を挙げた時には、顔では笑いつつ心の中ではキリスト像と十字架を睨んで中指立ててたくらいだ。

「そういうわけでした、貴方には今の記憶を残したまま、所謂『転生』をしていただきたいのです」

……なのにそんな俺が何で、天使か神様っぽい服装の若者からこんな提案を受けているんだろう？

白いキトンに、同色のヒマティオンを重ねた『自称・高次存在の使徒』の言葉に、俺は呆然途方に暮れた。

いや、仮に俺が無神論者ではなかったとしても、こんな状況に陥れば困惑に囚われた事だろう。

『……まさか俺、得体の知れない新々興宗教に絶賛洗脳され中とかではあるまいな？』

風邪っぽくて、意識がどこか呆として、けれども仕事も休める状況ではなく、ハッと気付けば赤信号と迫るトラック。

ああ、死んだかと、定まらぬ意識の中そう考えたのを覚えている。それが気付けば、なにやら大量の本がとっ散らかった部屋の中……。

『けど、その割には、落ちている本が俗っぽいというか、玉石混交

と言っか……』

目の前には男とも女とも付かぬ いや、服の着こなしを見るに、多分男だが 奇体な若者が笑顔で立っていて、未だ目覚め切れぬ俺に前置き無しでオカルト電波を発信中だ。

こんな状況に困惑せずに適応できるとしたら、ソレはきっと、クトゥルフ辺りを見てもSAN値が一切減らない、ガスライト版モリアーティ教授級の超現実主義者位だろう。

そして俺は、勿論、そんな人格破綻級の超人類ではない。

「ええと、人違いではありませんか？

俺は別に、記憶を残したまま転生させて何か出来るとか、そう言った能力や才能のある人間じゃありませんよ？」

だから何とか捻り出したそんな言葉に、若者はその顔に綺麗な笑みを浮かべたまま、首を横に振る。

「いえいえ、貴方が最も適任なのです」

多分アレが、生まれながらの狂信者の目と言う奴なのだろう。

善意一色に染め上げられて澄み過ぎた青い眼を持つ若者は、怖気を押さえることで精一杯の俺にそう笑いかけた。

その説明によると、俺は彼が高次存在の指示を受けた直後に死んだ人間の中からランダムに選び出されたらしい。

「……予定論者？」

キリスト教徒……にしては色々おかしいよな、転生とか」

つまるところ、我々から見れば全知全能に近い存在がその瞬間に通知し、結果俺が選ばれたわけだから、選ばれた俺は全知全能の存

在が名指ししたに等しい 全知全能、唯一神なる神を標榜するキリスト教の一派の理屈にそれは近いが、それにしては俺に言っている内容はキリスト教のそれにそぐわない。

「それに、特別ななど何も必要ないのですよ。

何しろ、今回の件に関しては、私の仕える御方から完全なフリーハンドを許されています。

貴方は、貴方の望むモノを何でも持って、次の生を迎える事ができますよ」

まあ、単純な理屈だから、全知全能がそれに近い存在を名乗る者の使徒であれば、同じ思想に辿り着いてもおかしくはないのだが……とまあ、そんな事はどうでも良いのだ。

問題は、俺の身柄が彼或いは彼らに掌握されていて、彼らがその理屈と神の指示とを信じきっていると言う現実である。

何せ、死んだと思った俺は今、確実に生きてるように思えるし、転生する為にはまず死ななければならない。

つまり、俺はこれから、転生とやらの為に殺される可能性があるわけ……。

『……不味いな、服は経帷子みたいなのに着替えられているし、持ち物はない。

出口もどこだかわからないぞ』

何せ、この狭いとは言えない面積の部屋は、堆く詰まれた本で手狭と感じられるほどの惨状に陥っている。

本の山の間を縫って出口を探すのは、正直難しいんじゃないだろうか？

そう、気付かれぬようちらちら周囲に視線を向ける俺に、若者はこう続けた。

「それで、貴方はどんな能力をお望みですか？」

『そりゃあ当然、今この場から逃げ出せる程度の能力だよ！』

内心そう喚き散らしながら、考えさせてくれと言って取り合えずの時間を稼ぐ。

『……………』

……………そうしようとしたのだが、思考は千路に乱れて全く定まらない。

先ほど 否、朝目覚めた時 からその傾向はあったが、何故か意識が纏まりきらないのだ。

散漫で呆とする、あたかも夢の中のような『感触』。

「ほら、でも何かあるでしょう？」

貴方の祖国で有名なアニメとかゲームとか……………。

この間の方は、固有何とかで財宝がどうか言っていましたけど」

そんな混乱に男とも女とも付かぬけたたましい声が滑り込み、思考は混沌に、気分はどんどんざらついて来る。

『……………まるで、塩の袋の中かなにかで揉まれているみたいだ』

特に、この声、目の前で喚き散らす若者の声に、俺を頭を抱えた。

『判った、考えるし話すから、もうその不快な姿を見せないでくれ、声を聞かせないでくれ』

目を閉じた、もう何も見えない、耳をふさいだ、もうなにも聞かない。

それでもただ苛つく『声』のみが思考を揺らし、俺は耐えかねて声を張り上げた。

「判ったよ、判った!。」

じゃあ、あれだ、俺を勇者王のエヴォリユダーにしろ」

最初に、昔好きだったアニメの主人公、その最終形態の名を挙げながら、もう自棄だった。

「それも、エヴォリユダー凱に、パスQマシンとZマスターの持つ能力全てを加えた奴な。

ああそれから、出力や計算能力も最低でも原作の5倍以上は欲しいな。

Gストーンの強化型を五つ以上装備で、そのエネルギーを受け止める体の基本的な耐久力は余裕を見てそれ以上。

それに、三重連太陽系の三つの星と青の星地球、それから俺の生まれ育った地球のあらゆる技術、文化、及びその所産全ての完璧なデータを乗せた、どんな複雑な検索条件でもノータイムで必要な情報呼び出せ、同量以上のデータを新しく蓄積できるライブラリを付けてくれ!」

出来るものならやってみろ、出来るだけ困らせてやると、後から後から、思いつく条件を付け加え、若者の声を打ち消すように、強く、大きくて叫ぶ。

そして……。

「わかりました、それでいいのですね?」

目を閉じ、耳を塞いだまま、俺は最後に、そんな声を聞いた気が、した。

．．．．

そうして次に気付いた時、俺はまどろみの中に居た。

暖かな空間と、奇妙な穏やかさと……先ほどのささくれ立った気分が嘘の様に、自分は落ち着いている。

そんな中、ああ夢だったのかと俺は思い、その次の瞬間には息を呑んでいた。

……否、息を飲んだと言うのは比喻だ。

今の俺は、とても息を吞める様な状態ではない。

今生の肉体と一体化している六つのGストーンの持つ基本的な機能　肉体の統括調整　それにより得られた情報が意識に届いて、俺は自分の現状を知った。

『まさか、転生云々が本当の話だったとは……』

……事実のみを端的に話そう。

今の状態は、胎児五ヶ月　未だ今生の母親の胎の中に、俺は居る。

こんな事を真面目に話すのは赤面モノなのだが、俺の今の体は、ZマスターとパスQマシンと同等以上（詳細は後述する）機能が組み込まれた六つのGストーンを備えるGストーンサイボーグを基にした生機融合体である。

そして、その能力のうちZマスターの機能は、本来は人の肉体のそれぞれのパーツに対応しているわけで、この肉体の場合、その能

力の発露についてはその部位に依存するわけではないのだけど、能力をつかさどるプログラムと言うか『情報体』的な物は、その部分に依存する特性を残しているらしい。

そう言った理由から、人間としての五体が整い、おおよその器官の原型が出来たこの時期に、この体の持つZマスターの機能が完全起動し、統括役のGストーンはそれを以って基本的な機能を回復できたと判断。

G ストーンの演算力を主な基盤として、俺の人格が回復した、と……。

『しかも、これ俺が適当に挙げた能力より、更にタチ悪くなってないか？』

そうして、自己診断結果に目を通した俺は、一通りの内容と付帯情報を認識し、内心溜息をついた。

俺の体は、要求どおりと言うか、パスQマシンとZマスターの全能力を備えていたが、どうやらオリジナルと全く同じように備えているというわけではないらしい。

例えば、パスQマシンと肝臓原種の無限再生、翼原種（因みに、俺の今の体だと肩甲骨に宿っている）の無限攻撃、肋骨原種の原子分解と言った関連する能力は基本的には全て連動し、出力的にその規模はオリジナルほどではない　外付けの専用システムを創れば上回る事も可能だが　ものの、機能自体は格段に高度化されている様なのだ。

例えば俺は、暗黒物質の吸収以外で得たエネルギーを以って物質復元装置の機能を発動させる事が出来るし、小規模復元であれば、光学異性体ではない全くオリジナルと同位の存在を複製する事も可能、作られた存在の色素が薄くなるといった劣化も起こらなければ、複製体へのエネルギー供給を断つてもそれが崩壊すると言う事もない。

『まあ、Gストーンを改良したり、それでZマスターやパスQマシンを再現できる文明なら、その位当たり前なのかもしれないけど……』

その改良型Gストーンにしても、サイズ比で性能は倍以上な上、五機の連動による能力増幅まで起きるというから、その能力はもはや俺の嫌がらせを遥かに超えてぶっ跳んだレベルに有った。

『……そも俺みたいな雑魚にこんな過剰戦力を与えて、一体ナニさせるつもりなんだよ、その高次存在様とやらは？』

単純に考えれば、今後それに見合う何かと正対するか、或いは、それを必要とするような何かをさせたいのかだが、これを為したモノが真正正銘の高次存在で、尚且つ、あの予定論者の解釈が正しいとしたら、それ以外の何かである可能性も否めない。

例えば、この能力を持つ俺が、ある一点にいたことが高次領域においては意味を持つとか、バタフライエフェクトの果てに遠未来に何かが起こるとか、そう言ったよりマクロな視点に立たなければ判らない何かの布石として、この状態の俺が今ここに配されたと言う可能性があるからだ。

『つまり俺は、一生起こるかもしれない何かを警戒して生きていかなきゃならないわけか……』

しかもそれは、そう例えば、三歳の誕生日に親が買ってきたケーキの蝋燭を吹き消そうとして、一本だけ消し残してしまった時点で既に終了していたとか、そう言った可能性もありうるという俺は、絶望的な現状に内心頭を抱えると、しかし……と気を取り直す。

『俺を何かに当てるつもりなら、こっちの気が緩む以前に現れる筈』

そして、生贄が目的ではないなら、一方的な死は避けられるだろう。

恐ろしい事に、この体はある程度の血肉さえ残っていれば、喩え脳を粉碎されようが、心臓を抉り取られようが、無限再生で瞬時に肉体を復元できる上に、パスQマシーンや無限再生はエネルギーが続く限り味方を復活し続ける事が出来る。

能力概要を見た感想だが、この肉体の能力は攻撃よりも防御に偏っていると思っ。

攻撃系　　と言うか、物理干涉系？　　の能力はとりあえず使える程度で、原作からの機能発展は殆どないと言うか、どうにかして手に入れたZマスタアのデータを安定させるために付けたと言うか、そんな感じの遣っ付けなのに、物質干涉系の能力はパスQマシンの基盤としてしっかり整理統合され能力は向上しているし、目原種等、情報処理&操作系の能力も四肢と胴体、頭にそれぞれ一個ずつ配されていたGストーンと緊密な連携を行っているようだ。

『まあ、その他の能力にしても自分で整備すれば向上しそうだし、防御が万全と言うのはありがたいよな』

まるで、時間がなかったんで、重要な能力だけ重点的に整備しましたって言うか、そんな風な雰囲気　　だが、死な（まけ）なければ、抗う事も逃げる事も出来る。

結論から言えば、魔術とか、奇跡とか言った不条理や、マップスみたいな恒星規模破壊戦が結構普通だったりするような超越文明の産物に出会いさえしなければ、俺は奇襲されても生き延び、十全に立ち向かう事が可能な能力を持っている。

だが、まあ奇襲されて痛い思いをするのも嫌なので、取り合えず早期監視システムは必要だろう、が……。

『……問題は、胎内での能力使用が母体に与える影響か』

パスQマシンの能力使用には結構なエネルギーが要る。

最低でも、一つのGストーンを全開起動させる必要があったし、胎内でそんな事をして、母親にどんな影響があるのかは正直判断のしようがない。

まあ、仮に流産したところで今の俺が死ぬことは無いし、最悪、無限再生で母親を修復すればいいのだが、こんな厄介な息子を持つただけで災難以外の何者でもない今生の両親に、未だ胎にある時点から迷惑を掛けるというのも気が引けるのだ。

だから俺は、まず内蔵ライブラリを起動する。

判らなければ学習すればいい 単純な理屈だ。

自分の体を動かすシステムやその影響を知る事は、間違いなく今後生き残るためにも有用だし、それに……正直に言おう、この時の俺は、自分が与えられた能力に心浮き立っていた。

不用意に使わない程度の注意深さはあったけれど、それは、力より知識に気が向きがちな性向によるものだったろう。

そうして俺はライブラリを起動し……そして、その浮き足立った思いを粉々に砕かれた。

契約！ 王の騎士パルパレーピア？

例えば、例えば、だ。

高出力で燃費が0に近い冗談みたいなエネルギー源で、尚且つ、殆どのCPUやメモリを超える演算能力と記憶容量を持つ情報集積回路でもあるスペシャルな物質を、それも六つも、惜しげもなく技術詰め込んだまるで芸術品のような機械一つにつき込み、更にそれが単体で長期間運用できるようにと、生機融合体なるオカルト染みたトンデモに加工した規格外のバケモノ。

そんな物を誰かが作るとしたら、どんな理由が考えられる？

俺が思いつく、その理由は二つ 一つは道楽、もう一つは、そんなモノを必要とするような特異な状況。

結論から言えば、この体の理由は後者だった。

『ノアの箱舟、か……』

資料が山積みになった読書スペース。

俺は、縁が擦り切れ、手垢が付いた古い帳面を机に置くと、盛大な溜息を吐き出す。

多分、この体の本来の持ち主は、折に触れこれを読み返していたのだろう。

擦れてボロボロになったその中身は、滅びに瀕した人たちが書いた、何の変哲もない無数の応援の言葉だ。^{エール}

ただ一人で、人類の未来を孕んで星の海に乗り出す勇者達に向けられた……。

俺は帳面をパラパラ捲ると、ライブラリの補助機能の一つである、^{バーチャルリアリティ}この大図書館をぐるり見渡した。

『……本当に、俺にナニをさせるつもりなんだよ』

それから手にした帳面と、自分の掌をじつと見比べる。

本来、この体に内蔵された電子情報でしかないこの帳面が、こんなボロボロの姿に見えるのは、手に取った回数を外見に反映させると言っ、VR大図書館の機能の一つによるものだ。

そういった、勇者の心を慰撫する為に設けられた機能に、使用の痕跡が残っている。

ソレは、すなわち 俺は特大の溜息を吐き出すと、資料の上に突っ伏した。

『少なくとも、この図書館には、この体を作った時点の【青の惑星】が直面していた【何か】の情報はまるでない。

技術レベルを考えるに、覇界王事件は確実に乗り越えている筈なのだけれど……』

そして、それは本来のこの体の持ち主を初めとする、ただ一人身一つで星の海に漕ぎ出した勇者達がどのような旅路を辿りどんな結末を迎えたのかについても、同じ 果たして、青の星の文明はその後継を得る事が出来たのか、出来なかったのか？

或いは、これは俺の指定した肉体がどういったものになるのかを知る為に行われたシミュレーション的なもの 【何か】について記されたデータが存在しないのは、そもそも【何か】など存在しない。ただそう言う設定だけがあったと言う解釈だ。でしかなかった可能性もあるが、それを言うなら自分の現状だって同じである。

例えばこの現状が、生前の俺のようなたつの上がない三十男が、自慰的な目的で自分自身を投影した男を主人公に据えて書いたチラシの裏の殴り書きではないと言う保証が一体どこにあるのだ？

特異な現状に触れれば触れるほど、失われていく現実感 実際、これは仮想現実だが の中で、俺は突っ伏したまま、湧き上がる自虐にひとしきり浸ると、何とか気分を切り替え身を起こした。

『ここで突っ伏していても、状況は変わらない』

そう自分に言い聞かせて、今やるべき事、やりたい事を考える。
半ば以上誤魔化しと言うか、現状から目を逸らす為に、せめてモチベーションでも上げるかと、思ったのだが……。

『三重連太陽系と、青の星の復活……いや、新生かな』

でも 『今、自分がやりたい事』 それを考えた時、最初に俺の頭に浮んできたのは、こんな事だった。

結局の所、やはり自分は、ガオガイガーが好きなのだろう。

まあ、もう何年も前の話なのに、DVD・BOX特典DVDの内容がさらっと出てくる辺り、そんな事を再確認する必要性はまるきり無いわけではあるが……とにかく、俺にとつて青の星の文明が負けっぱなしでそのまま消滅なんていうのは、可能性だけでも考えたくない、実際に目にしたら、自作SSでも書いて物語を捻じ曲げなくなるような糞結末だ。

できる能力を備えているのなら実行したいと思うし、そのための努力を重ねている限りは、この体を持つ事に対する引け目も緩和されるだろうと言う打算もある。

その上、この体には、物質復元装置が備えていた三重連太陽系復活プログラムを初めとした、『勇者』が入手できなかっただろう赤、紫、緑、三つの惑星に関する詳細なデータが存在しているのだ。

『……目的がそれならば、遊星種達や勇者ロボ軍団を複製して協力を仰ぐことも出来る』

ペイ・ラ・カインやパルス・アベル、パルパレーパ等が備えるだろう知識や技術力は、あらゆる状況下で活用可能な上に、ライブラ

リ内データとの複合による発展の可能性を秘めているし、ボルフォッグやボルタン、ポルコートと言った諜報・忍者系のメカノイドは、遭遇するかもしれない『何か』に対する警戒を行う上で大いに役に立ってくれるだろう。

ここが、ギャレオニア彗星とその向こう側が存在するガオガイガ―世界『以外』であれば、遊星主も大きな害をもたらす暗黒物質の大量消費は行えず、その結果、俺や勇者達との間の利害対立は成立しない。

そして、俺に自分の機能で代用できるピサソールを復活させる気が無い以上、少なくとも、彼らがピサソール級の物質創造装置かそれを生産し得る施設を手に入れるまでは、対等或いはこちらが優位な契約関係を結べるはずなのだ。

後は、誠意と行動を以ってそれを友情へと成長させればいい。

『とは言え、それが一番難しい気もするがな』

一人そうごちると、俺は少しだけ笑みを漏らした。

特にパルス・アベルやビルナス辺りとは、とても友情を育める気がしない。

『まあ、幾ら俺が小物なアレでも、本来のペイ・ラ・カイン辺りならそれなりに面倒見てくれそうだし、アンチプログラムの彼が存在すれば最悪の事態の抑止力にもなってくれるだろう』

俺はそう樂觀すると、まずパルパレーパとの接触をとることにした。

幸い、この体には長期航海用のVR環境ソフトや、その上で動かす様々な用途の人格データ等も含まれている。

環境ソフトに適当な小部屋のデータを読み込み、その上で動くAI用の躯体にパルパレーパのそれを移植すれば、彼との対話は実現

可能なようだった。

『もうちょい頼りになりそうな医学・微細機械工学系AIがいたら、そっちに任せる手もあったんだがなあ……』

正直な所を言えば、最初に接触するのはペイ・ラ・カインにしたかったのだけれど、遊星主の中で医学を司るのは残念ながら彼であつたし、そのナノマシン操作能力は胎児と言う環境下で外界に干渉するのにすぐぶる役に立つ。

そして、ライブラリにそう言った技術を扱えるAIのデータも一応ありはしたものの、こう言ったデリケートな分野においては『AI＝人間のサポート役』と言うのが四つの惑星の変わらぬ定石だったようで、パルパレーパを除いて最も使えそうなモノが、この体に元々内蔵されていた開拓時用のAIプログラム達 人格付きの成長型だが、将来的には兎も角、現時点において柔軟性にはそれほど期待できない とあっては、こんな特異な状況下での相談役に等使える筈もなかった。

ライブラリからパルパレーパの情報を取り出し、環境プログラムを変更 ライブラリや環境への干渉権を持たない躯体を設定し、彼のデータを移植する。

最後にパルパレーパの初期状態を、小部屋の椅子に腰掛けた状態に設定し、俺は一度息を吞んでから、おそろおそろそのプログラムを立ち上げた。

「むう」

俺の目の前、座る椅子毎可視化したパルパレーパが、眉を潜め、ゆっくり目を開く。

「……これはどうした事だ。」

我々はG G Gに敗北したのではなかったのか？」

彼はそう言っただけ顔を上げると……

「ぬう、貴様は、エヴォリユダー・ガイ!？」

……眉間に険しく皺を寄せ、そんな驚きの言葉を口にした。

・ ・ ・

それから、一部の情報 アニメとかアニメとかアニメとかを伏せつつ、パルパレーパに一通りを説明し終えるまでに、客観時間で三分、主観時間でその十倍ほどの時間を費やした。

当初は何の謀略だと警戒していた彼だったが、G G Gの入手し得ない幾つかのデータを提示する事で、こちらに彼を騙す意図は無いと理解してもらえたようだ。

「なるほど、些か信じがたい事態ではありますが、このようなものを見せられては納得する他にありませんね」

そう言って難しい顔をする彼に、まず第一関門は突破かと、胸をなでおろす。

因みに、先のエヴォリユダー・ガイ発言についてだが、確認してみた所、どうやらこのV R上の俺の肉体は本当に獅子王凱の姿をしているようだ。

転生前の最後の出来事については、本当に混乱していた為に詳細までは覚えていないのだが、多分、能力を指定する時にそうと取れ

るような事でも口走っていたのだろう。

敵であった遊星主たちや、隊長の姿を盗られた機動部隊の面々の受けは悪いだろうが、それ以外への押し出しについては平々凡々たる元の俺よりチョベリカチョロンのおにーさんの方が良かるうなので、まあ、収支はほとんど言った所だろうか？

そうして、格段に当たりが柔らかくなったパルパレーパに、当面の俺の目的について説明する。

この地で、不測の事態に対する防衛体制を整えつつ、三つの星の命と文化を引き継ぐ新たな星　青、赤、緑、紫、四つの光の重なる地だから、仮に白の星とでも呼ばうか　を産み出す準備を行う。

三重連太陽系を本来の形で復興できないのは、貴方達にとつては不本意だろうが、出来たら俺の目的を手伝って欲しい。

こちらの目的をある程度達した後、まだ貴方方がそれを望み、またそれが他の惑星に大きな悪影響を与えない形であれば、三重連太陽系の復元についても最大限の協力を約束する。

拙い言葉で綴ったそんな内容に、パルパレーパは何を思い、選択するのか？

こちらの利用価値か、面従腹背か、或いは、真なる意味での協力か　そう頭を下げる俺に対し、パルパレーパは椅子から立ち上がると地に片膝を着いた。

物語の騎士の様な姿勢でこちらに頭を下げると、こう口を開く。

「一度は頓挫した三重連太陽系の復活が、どのような形であれ成せるといっているのであれば否が応もありません。

この身は剣となり、盾となりて御身を守り、助けるでしょう」

思い起こしてみれば、ソルダートの言動もアレだし、ピアデケム

の服装もアレだった。

ボルトンにいたっては忍者だし……。

『赤の星で戦う者の思想って、基本的にこう言う物なのか、もしかすると？』

まさか、指揮系統の女性陣がDSで、下で戦う男達は騎士（武士？）道精神だとも言うのか？

封建社会の完成系は、少数のサディストと多数のマゾヒストによって構成される。そんな漫画の一説を思い出してしばし呆然、俺はパルパレーパの怪訝に我に帰ると、慌てて首を横に振った。

「ま、まってくれ、俺はどちらかと言えば、忠実な部下より、共通、或いは近似する目的の為に邁進する仲間が欲しいんだ」

「しかし、パスQマシンの機能で我らを再生するのであれば、要は貴方。我らは変えの利く端末でしかありません」

FINALにおいて、終始シビアと言うか達観したというか、極論染みた言動を繰り返していた男が放ったその言葉はやはり極論で、だから俺は、断固たる意思を込めて首を横に振る。

「いや、俺は不測の事態に備えて、遊星種をレプリジンではなく独立した個体として新生させるするつもりだ。

最終的には、仮に俺が倒れても、時間さえ掛ければ四つの星が復活可能な状況まで持っていきたい」

リスクは分散するべき物だ。

それが成っていなかったから、あれほど圧倒的だった遊星種はGGに敗北した。

変えの利くものと利かない物、上位と下位、そんな冷たいロジックだけで判断していた事が地球との間に対立を生み、常に最短距離を力で突き進む方針が生んだピサソールへの一極集中があの大逆転を生んだのだ。

「……我々が離反する可能性は考えないのですか？」

「その前に協議し、互いの意思を摺り合わせられる組織を目指したいと思っている。」

それに……」

目的は同じで、同一宇宙内なら物質復元装置は使えない。互いに、積極的に対立するような愚さえ犯さない理性を持っているなら、それはそれでありだろう。

「フム、甘いと言うか、青いと言うか……まあ良いでしょう。どちらにせよこちらには損は無い」

俺の言葉にパルパレーパはそう言って立ち上がった。

「貴方がそういうのであれば、こちらの方が良いでしょう。そう言えば、まだ名前を聞いていませんでしたね」

そうして差し出された彼の右手を、しっかりと握り返す。そして……

「……ありがとう、パルパレーパ。それと残念ながら、名前の方はまだ俺も知らないんだ」

俺はそう苦笑しながら、投げかけられた問いにそう答えた。

女王降臨！ ドS幼女ヒロインアベルちゃん颯爽登場！

そんなわけで、意外と騎士道精神旺盛な奴だったパルパレーパの協力を取り付けるのに成功した俺が、まず最初にしたのは、センサー能力で取り込んだ母体のデータを医学担当の遊星種に丸投げすることだった。

Gストーンサイボーグである獅子王凱や、ルネ・カーディフ・獅子王、それに、Gストーンの根源である異能力者、ラティオこと天海護…… そう言った事例を見れば判るとおり、俺の体に組み込まれたこの緑の石が放つエネルギーは、基本的には生物の肉体に害を為さない。

…… 為さないのだが、ソレはあくまでも基本的にはのお話で、ウチの母親の場合、ただでさえ身を傷める妊婦が、生機融合体等と言う木に竹を接いだようなトンデモを抱えた状態なのだ。

ナニがあるか判らないのだから、注意するに越した事はない。

『…… 害を為さないってのも程度問題だしな』

それにそもそも、生体に害がないとは言え物理力を発生するのがGストーンエナジーなのだ。

もし俺が、パスQマシーンを使おうとして力加減間違えたら、ジエネシックスオーラのな それ用に調整されてないので、そのものではない パワーで、母親どころか病室ごと、内側から爆ぜてしまっただろう。

そして、そういった事態を防ぐ為、Gストーンテクノロジーと医療の双方に長けたパルパレーパの目が要る。

まず最初に、Gストーン一個分の演算力をパルパレーパに廻し、そこに知覚系能力から得られたデータを丸投げする。

「準備は良いようだ、エヴォリユダー……」

その機能を掌握したと、しばし、目を閉じていた彼がそれを開くと共に、俺は一つ頷き、全身に六つ配されたGストーンの出力を少しずつ高め始めた。

状況に応じた高度な使用なら兎も角、安全な場所での能力行使は、半ば本能的に　　と言うか、この肉体と一体化しているGストーンに込められたプログラムの作用なのだろうが　　扱う事が出来る。

『或いは、この体の本来の持ち主である勇者の、その痕跡がそれを可能にしているのかもしれないが……』

額、両手甲、両足甲、心臓……俺は、六つの源から極自然に力を引き出し始めた。

一箇所に集まる力が極力小さくなるよう、全て同時に少しずつ励起、微かにでも漏れては困ると、極力注意を払ってパスQマシンへ注ぎ込む。

「よし、エネルギーの漏れはないようだ。

……母体の状態も非常に安定している」

全身に分割配置されているZマスタープログラムとは異なり、パスQマシンは俺の全身に遍在し、最悪Gストーン一つ分とその周辺の肉さえ残っていれば、それを足がかりに肉体を復元できるよう作られているようだ。

だから、一つを強くより、六つを少しずつ駆動させる方がエネルギーの漏れは少なくなる。

少しずつ、少しずつ……慎重に高めていったエネルギーが、パスQマシンに流れ込み、徐々にその機能が目覚めて行く。

そして……やはりと言うか、この体の機能の根幹はパスQマシン

にあるらしい。

『なんか、気持ちが良いな、これ……』

それに力が満ちることに感じる快美な覚醒感に、俺はかすかに身を震わせ、いけないと、眉を顰めた。

ただでさえ苦勞を背負い込む事になるだろうこの体の母親に、それ以上の傷を与えるのは本意ではない。

特に、与えられた力を濫用する快樂に飲まれて事をしくじる等、人並みには善良で潔癖な、俺の羞恥に耐えられるものではなかった。だからと、意図して力を絞る。

細く、細く、途切れぬように、必要より僅かにも多く力を込めてしまわぬように……。

『もう充分だ』

……やがてそんな確信が心の中に浮び、俺は能力を起動した。

あらかじめ用意しておいた情報を元に、エネルギーを物質へと変換　青の星ではかつて創世炉と呼ばれていたシステムを更に高度化した過程を踏み、俺の体内に一個の微小機械が顕現する。

「……ケミカル・ナノマシンの生成を確認、こちらの制御下において。」

母体への影響は今の所は見られない。

当初の予定通り、体内の老廃物を材料に増殖させて、必要量に達した後、臍帯を通じて母体内に送り込もう」

間髪入れず届けられたパルパレーパの報告に、俺はほっと息を吐いた。

「ありがとう、パルパレーパ。
それから、後のこと暫くは、専門家の貴方にお任せしてもいいかな？」

その間に、他の人達とも交渉しておきたいんだ」

今回実際に試して判った事だが、この体では大規模な創生には出
力が足りていない。

そもそも考えてみれば、パスQマシンは物質復元装置の中枢であ
ってそのものではなく、地球、護、ギャレオン……それらが複製さ
れたのは全て、パスQマシンではなく、物質復元装置の近くであっ
た。

ギムレットの無茶な合体や、レプリ護の使った真のヘル・アンド・
ヘブンを考えるに、恐らくパスQマシンとは、物質復元に必要な膨
大な情報処理や、対象の詳細な解析等を行う演算処理装置なのだろ
う。

『ああ、それに、暗黒物質をエネルギー変換するデバイスでもあつ
たか』

そう考えると、この体が創造系の能力を充分以上に備えているの
は単に幸運だったのか、或いは、向こうがこちらの意図を汲んでそ
の能力を持つ体を与えてくれたのか？

兎も角、安全面を考えて大量の暗黒物質を消費する方法は使わな
い方針であるから、大出力のエネルギー源は必要不可欠であるし、
それに、パルパレーパと並列作業していた点を差し引いても、俺単
体では大規模創生には演算能力が足りていない感じもあつた。

胎児の段階にある今の状態では、肉体の質量が圧倒的に足りず、
この体が本来持つ能力を充分発揮できていないと言う樂觀要素もな
いではないが、テラフォーミングのような繊細な操作を必要とされ
る惑星規模の改変作業を行うのなら、何らかの補助装置を併用す

るのが無難だろう。

『遊星種のように星系規模の大規模復元を行うわけではないから、あれほどのサイズは必要ないだろう。』

それに、防衛能力も必須だから……まあ、ジャイアントメガノイド辺りが順当か？』

能力規模や傾向を考えると、艦載機を無限に創造する能力を持っていたピアデケム・ピット辺りをモデルにするのが近道だろうか？
どちらにせよ、俺には新たなメガノイドを設計する能力などありはしないわけで、これは当初の予定よりかなり早い段階で、多くの遊星主やAI達を呼び出し、その協力を取り付けなければ、目標の達成は覚束ないようだ。

『となれば、まず最初は、パルス・アベルとペイ・ラ・カインか……』

かのジエネシックを作り上げたカイン、ジエイアークやピアデケムの作り手であるアベル。

彼らのレプリジンである二人の遊星種は、恐らく現状望みうる最高の技術者だ。

……あー、いや、常識的に考えれば、彼らが手ずからガオガイガーやジエイダーを造ったとは考えにくいのだけれど、遊星種にそう言ったスキル持ってそーな人って、他に居ないんだよね。

『特にアベルは、J達に生みの親に逆らうのがどうのと言ったような記憶があるし……』

そんな事を考えながら返事を待っていた俺の、その表情から何を読み取ったのか？

パルパレーパはこちらを眺めて一つ溜息を吐くと、ああと頷いた。

「こちらはそれで構わん……が、気を付けるといい。
アベルは私とは違う、一筋縄ではいかんぞ」

「ありがとう、パルパレーパ」

そう一言を俺に告げると 交渉には関わらない そんな意思の表明だろうか、ふいとその姿を消す。

元々、何人かの勇者ロボ、AI、遊星種達を呼び出して作業を行うつもりであったから、俺達が今いる仮想空間の構成、パルパレーパと作業の下準備を行った段階で、数人が快適な作業を行えるように変更してあった。

「ふむん」

小部屋の中に一人残されて、俺は己が口元に手を当てる。

信頼を得ようとしているのか、それとも思った以上に義理堅いのか？

或いは、それほどまでに俺が頼りないというのだろうか？
自嘲気味の苦笑を浮かべ、俺はライブラリのデータへと手を伸ばした。

カイン、ペイ・ラ・カイン。

アベル、パルス・アベル。

ペイ・ラ・カイン、パルス・アベル共に、何等かのマインドコントロールを受けている節があったので、できる限り多様なデータを取り出し、そちら方面に造詣の深いAIの助けを借り分析する。

『……やはり、二人とも操作されているようだな』

パルス・アベルには、自分がレプリジンである事に気付かないように、三重連太陽系復活以外に目を向けないようにする為の精神操作が、ペイ・ラ・カインに至っては根本的なところで大規模な洗脳処置が施されている。

恐らく、どちらもオリジナルのアベルによる物だろう。

『もしかすると、ギャレオンに内蔵されていたカインの人格データはこの為の物か？』

本来、ペイ・ラ・カインがジェネシックとフュージョンし、遊星主暴走時のアンチプログラムとなる予定だったわけだから、アベルがこれを抑えようとした場合、恐らくは彼女の手により作り上げられたペイ・ラ・カインに細工される可能性が高いのだ。

『ラウドGストーンは、緑の星の技術の産物……フュージョン時の共鳴を利用して、ギャレオン側のデータでペイ・ラ・カインに干渉をかける事は不可能ではないはずだ』

特に、ジェネシック仕様のGストーンは、ラウドGストーンに対して支配的な能力を持つ。

本来ならその試みは高い確率で成功したのだろうが、機界昇華を食い止める筈のJアーク艦隊が三十一原種の強襲によりその真価を発揮する事無く敗退　カインはギャレオンを対ゾンダー仕様に調整し、ラティオと共に送り出さざるを得なくなった。

そしてその旅路の中、ギャレオンはパズダーと戦って中枢部を損傷を受ける。

それも、ザ・パワー、ジュピターXの力を借りねば人格プログラムを起動することすら出来ないほどの……。

『その結果、ギャレオンは遊星種に対する抵抗力を失ってしまった、

と……筋は通るな』

だが、今の問題はそんな事ではない。

問題は、ちょっとした操作で本来の姿に戻せたパルス・アベルとは異なり、彼らのアンチプログラムとしてのペイ・ラ・カインを再生するには、相当の手間と時間が掛かるという事実だ。

まあ、その手間な作業を行うのは俺ではないのだが、直ぐには終わらないと言うのは結構大きな問題である。

『それとも、カインの修復が終わるまでここで待つか？』

なるほど、先のパルパレーパの言葉はこの事を踏まえたものだったのかもしれない。

ペイ・ラ・カインは後天的な洗脳を受けた訳ではなく、最初からそう創られていたわけだから、そもそも洗脳されていないデータなど、この世のどこにも存在しない。俺の交渉相手はどう転んでもアベルとなるからだ。

先にカインの助力を取り付け、アベルとの交渉を有利に執り行う。そんな当初の予定が頓挫し、俺は重い息を吐く。

単純に、遊星種の人格を損傷前のギャレオンの記録で上書きするだけでよいのなら、すぐにでもペイ・ラ・カインは再生可能なのだが、ファンとしての拘りと言うか、ギャレオンの中で護くん（ラテイオ）を見守り続けたその記憶を、カインには持つていて欲しかった。

しかしそうなると、ペイ・ラ・カインと原種との決戦で完全に破壊された人格データを元に、本来あるべき姿のカインを再構築、原種決戦以降のギャレオン記憶を付け加えた上で、遊星主として破綻しないよう調整を行わなければならない。

俺に内蔵されたAエータは、青の星再誕の過程で生まれてくるだろう新しい子供達の保護者として肉体を持たせる可能性を ぶ

っちゃけ、勇者の伴侶になる可能性も 考慮した上で制作された
ものなので、中にはそう言ったデータの修正、改良やマツチング調
整を行う技術を持つ個体も含まれている。

なので、修復作業自体には不安は無いのだが……。

「今更、延期するって訳にも行かないよな」

そう、腹を括つてもう一度、今度は意味の異なる息を吐く。

奴隷は要らない、仲間が欲しい あの時混乱していたが、放
つた言葉自体は紛う事なき本心なのだ。

そして、パルパレーパにそう言い切った以上、俺はソレが本意で
ある事を行動で体现しなければならぬ。

『カインの修復はこのまま行っ、アベルとは俺一人で、誠意を持っ
て交渉する』

正直、心のどこか冷静な所で 状況に酔っているのではないか

そう自分でも思っていた。

俺はたいした能力を持っていない雑魚で、だからカインの修復を
待つのが、戦術的には正しい。

けれど、けれども……。

「……そりゃあ、勇者の台詞じゃないねえ」

頭の中を、顔に老人班の浮いた別作品の勇者の姿が過り、俺は思
わずその言葉を紡いでいた。

Gストーン、困難に抗おうとする心を力に変える無限情報サーキ
ット、勇者の証。

困難から逃げるものに、Gストーンは輝かない。

『或いは、さつき感じた出力不足もそのせいかもな……』

この身に溶け込んだ進化型Gストーン 正式名称はExcee
d-Gと言っらしい もソレは同じで、非常に際し人間を機体に
合わせる事を選んだ青の星の人々は、この石にラウドGストーンの
様な、誰でも安定して高出力を出せるような調整は一切施さなかつ
た。

俺は、そんな体を駆って、本来の勇者の代役を勤めようと考えて
いる。

ならば、俺も勇者にならなければ……等と分不相応な事を言う心
算は毛頭無いのだが、最低限逃げてはいけない選択も存在すると思
うのだ。

『考えてみると、カインを頼れなかったのは返ってよかったのかも
しれないな』

まあ、アレだ。

はいてないどころか布一枚羽織っただけの、ゼンラー（推定）ド
S幼女なるスパイシーな存在に対し、肉体以外は全部小市民な俺が
忌避感を抱くのは、正しいとまでは言わないものの、間違っではい
ないと思う。

いや、中には、俺の業界では御褒美だ等と言い出す奴もいるのか
もしれないが、少なくとも俺は、あれにハアハア出来るほど訓練さ
れてはいない……と言うか、そもそも幼女にハアハアする感性自体
持っていないし。

『大体、ガガガの女の子にハアハアできるとしたら、下限はギリギ
リあやめちゃんが入るか入らないかだよな』

格好よすぎるデザインのPHSを高々と天に差し上げる初野あや

め　　ガガガ主人公の片割れ、天海護の恋人である初野華の従姉だ
の勇姿を思い出し、俺は一人頷いた。
そして思う。

『そう言えば今の俺、アレの複製創れるんだよな？』

……ここがそう言ったものの存在する世界で、そう言ったものを持ってもおかしくない状況になったら、真っ先にアレの魔改造型を創ろう。

そう心に決めて俺は……と、はなしがそれた閑話休題。

えーと、あ、けれど、けれどもだ。

ソレを理由に逃げるというのは、正しくない、明らかに間違っている行為だと思うのだよ、うん。

大体、対峙する前から心が負けている選択を選ぶような人間に、どうして勇者口ボ軍団が味方しようか？

そう、自分の精神を盛り上げ、俺は口にたまった唾液を飲み込むと、心の中の赤いボタンを押した。

何故赤なのか、ボタンなのかは聞かないで欲しい。

なんとなく、そう言った心算になっただけだから、と、そして……

「なるほど……」

そして、間をおかず、目の前に現れた椅子に腰掛ける少女の姿は、今にも折れそうな位にか細く見えた。

「……私自身もお人形さんだった、そう言う事ですか」

思考が声に現れている事自体、頂垂れた彼女は気付いていないのかもしれない。

表情は虚脱し、涙が流れていない事が奇妙に思える、そんなパル

ス・アベルの有様に、俺は目を大きく見開く。

恐らくは、前世の俺より獅子王凱の体の方が遥かに背が高い事、アニメではディフォルメされていた彼女が、ここでは本当の意味での現実的な姿で存在する事……そう言ったギャップの影響もあるのもあるのだろう。

強い、罪悪感　元々、原作においてもどこか空疎な痛々しさを纏っていた彼女が、ここではこんなに小さい。

そんな彼女を無言、眺めていたいどれだけの時が流れ過ぎたのか？

「……ところで、何時までそうやって見ている心算なのですか？」

静止した空間を再び動かしたのは、俯いたままの彼女の、そんな一言だった。

「どれだけの時間が経ったのかは判りませんが、ずいぶんとまあ腑抜けたものですね、エヴォリユダー」

怜悯な顔つきに冷笑を浮かべ、傲然、こちらを見上げた少女の姿に、クスリ、我知らず微かな笑みが漏れる。

彼女はこうでなければ　自然、そんな思いが浮び、俺は一瞬目を瞑ると口元を引き締めた。

そんな俺の表情の変化に、アベルは戸惑ったように眉を潜める。

「それに、こうして私を蘇らせるなど、一体何を考えているのですか？」

そして、連ねられた彼女の言葉に、俺はこう答えた。

「いや、始めましてだ、パルス・アベル。」

確かに俺はエヴォリユダーだが、獅子王凱ではない」

そう告げられた少女の反応は、悪いが中々の見ものであったと思う。

「はあ？」

らしからぬ言葉と稚い表情……絶句したアベルに、俺は自然、笑顔を向ける。

何と言えいいのだろう、知識はあっても、経験としてその体に染み付いてはいない？

大人の記憶を持つ子供と言う彼女のアンバランス アニメでも微妙に透けて見えていたソレを、俺は初めて可愛いらしいと感じた。

「名前はまだわからないんだ、だから、俺のことは好きに呼んでくれて構わない。

それから、俺が君を蘇らせた理由は……」

そこで一端言葉を切ると、俺は意識して真面目な表情を作った。

「俺たちは、互いの目的の為に協力できる そう考えたからだ」

・ ・ ・

「……何を言っているのですか、貴方は。全く理解不能です」

最初は、呆れ顔でそう言い捨てたアベルに、現状を納得させるまでには相応の時間を要した。

尤も、精神誘導が解けた今の彼女には、三重連太陽系をそのまま復活させる事に拘りは無い　　と言うか、遊星種の敗北の根本に、オリジナルの判断ミスをそのまま引き継いでいた事があるのではないかと考えている節がある　　ようで、現状を受け入れたその後は、四つのエッセンスを受け継いだ新しい惑星『白の星（仮）』を誕生させたいと言う俺の荒唐無稽な夢物語にも、それなり以上の興味を持って耳を傾けてくれたのだけれど……。

なんでも彼女によると、『技術以外に引き継げる物が殆ど存在しないのにもかかわらず、個人の主観を頼りに全く同じものを再現しようとするなんてナンセンス』であり、『ただでさえ手が足りないと言うのに、その為に敵を作るなんて馬鹿のやる事』なのだそう。逆に、同じ過ちを犯さないよう新たなエッセンスを取り込もうとしている俺の思考自体は、『間違いではない』のだそうだ。

その能力や情報蓄積、白の星構想の提唱等の諸々から、俺が物事を中心になるだろう事には少々思うところもあるようだったが、その点については

「まあ、おいおい私に、精神的に従属させていけばいいことです」

等と、見惚れるような綺麗な笑顔で、真正面からそんな恐ろしげな台詞を吐いた。

正直、ゼンラー・ドS幼女に精神的に従属させられるなんて考えたくも無い状況なので、最悪の状態に備え、彼女の肉体を創造する時は、必ず成人女性の状態まで成長できるモノにしよう。

そう固く誓った所で、俺たちはパルパレーパと合流し、今後の作戦会議を開く事と相成った、のだが……。

「……し、獅子王、麗雄？」

「……おやおや、中々面白いことになっているようですね」

合流したパルパレーパが重要な報告と称して投影した記録映像により、俺の目の前に見えかけていた未来予想図は、丸ごとひっくり返された。

衝撃！ 紫の忍狼 ボルフォッグ&ボル…た、ん？（前書き）

獅子王凱の生年月日のデータが見つからなかったので、日付はランダムに決めました。

現在年は、クロス先の技術を考慮&誤差範囲を超える年と言うことで、単純に凱の生年の三十年後です。

衝撃！ 紫の忍狼 ボルフォッグ&ボル… た、ん？

状況を簡単に説明しよう。

俺がバルパレーパに頼んだのは第一に、母の胎内でこの体の機能を使用した際の、母体への影響を最小限に抑える為のナノマシンの製作と、その運用である。

その副次的な効果として、母体側詳細データのリアルタイムの入手により、センサー系に入る、母体と言う障壁の放つ情報ノイズを排除し、よりクリアな外界情報を入手する事が可能になった。

『……いや、正確に言えば今までもできたんだが、アクティブ系探査は母体に与える影響が心配だったんだよな。

出力的に……』

ソレによって得られた情報を簡単に纏めたものが、以下である。

俺の両親：獅子王麗雄、絆夫妻

俺の名前：凱

現在位置：日本

現在日付：2014・12・07

色々な意味で、悩む内容であった。

麗雄博士の所属が宇宙開発公団ではなくJAXA、つまり、宇宙航空研究開発機構であるとか、現在時間が原作における獅子王凱生誕の29年 なので、俺が生まれるのは原作凱の三十年 後であるとか……ここが勇者王世界そのものではないことは確かなのだけれど、三重連太陽系と繋がり無い世界であるとは断言できないと言う、微妙なラインを保っている。

「まあ、私達にしても、以前のプランをそのまま実行するつもりはありませんが、この世界の情報の収集は、早めに進めた方が良さそうですね」

場合によつては、『この世界の遊星種』と戦う可能性もありそうですね。　そう言葉を締めたアベルに俺は無言、頭を下げた。

「旧来の遊星種機構の脆弱性は、既に立証されています。ソレをそのまま推し進めようと考えるほど、私はお馬鹿さんではありませんよ」

少女は俺にそう返し、ですが…と言葉を付け加える。

「だから貴方に、感謝する必要が無いとは言いません。私としては、ソレを言葉ではなく、形として現してくれると嬉しいですね。

例えば、貴方の体に使われているE×Gの技術情報であるとか…

…」

そう流し目を与える少女に俺は苦笑……しかし、一瞬も迷わずに良いよと答えた。

「元々遊星種 エヴォリユダーボア いや、勇者ロボ達も含めた皆の新しい体は、E×Gを用いた生機融合軀体にしようと考えていたんだ」

「……はあ？」

返ってきた答えに、全く理解できないと言った風な表情で目を丸くしたアベルに、俺は笑顔を向ける。

「いや、だって生きている人間の感覚、理解できないとその内ギヤツプが溝に変わるかもしれないだろ？」

俺、遊星種がGGと戦った時の記録を見てるけど、目の前であんなふうには振舞われたら普通は引くし、再生できるからって同じような行動求められたら高い確率で反発されると思う。

だってさ、GGGのロボットの方が、まだ生身の人間に感覚近いんだよ？」

それに、これからかなりの期間、この星の人間の間に紛れて活動する事が考えられる為、一目でソレとわかるような姿では困ると言う事情もあった。

尤も、この体の様にEXG六基同時励起にZマスター&物質復元装置搭載とかにすると創造の難易度が高すぎるので、EXG二基程度を用いた体に、遊星種としての能力を付加する形になると思うけれど、そう付け加えて俺は、二人にこう続ける。

「ただ、二人には悪いけれど、先にまず勇者ロボ用の、人間サイズの躯体を創って欲しいんだ」

現状、俺達が最も必要としているものは情報であり、それを円滑に手に入れる為には、地球の社会に対する知識を備えた勇者ロボ達に動いてもらうのが手っ取り早い。

特にボルフォッグとポルコートは、捜査や諜報に関する技術や知識を持ち合わせているので、現状では最も役に立つ筈だ。

また、目的及びサポート人員の不在を考えると、彼らが使う体は本来のメカノイドより、人間サイズの物の方が都合がよいが、前二者は、それぞれ犬神霧雄、エリック・フォーラーより人格移植を受けて誕生したAIである為に、人間サイズの躯体への適応も早いと推測される。

そんな俺の要望に返った答えは、賛成一、条件付賛成が一、であ

った。

因みに、賛成はパルパレーパ、条件付賛成はアベルからの意見で、彼女のつけた条件はどちらかの代わりにポルタン用の躯体を作成したいと言うもの。

確かに俺が提案した二機は基本設計が同じ派生機であるし、今回作られる体は人間のそれをベースとしたもので、ポルコートの唯一の売りである超嗅覚は割合容易に付与できる。
イオンセンサー

だから、最初に製作する片方をポルトンの物にしたいという主張は 勇者達の躯体が完成した後に、俺が遊星主を切り捨てるのではないか？ そんな彼女が抱くだろう当然の危惧を考えても、正統なものだと言えた。

問題は、二種の同時並行開発による躯体の開発期間延長だが、遊星種の設計の基本は、ラウドGストーンを基盤とするサイボーグボディなので、まず勇者ロボ用の躯体を作成し、ソレによって得られたデータを基に手直しする程度で、生機融合素体として充分使用可能であると考えられる。

出来るだけ早く必要な情報を集めたい現状の中、先行して単独行動が可能な仕様に直した遊星種を創造しろと言わないだけ、彼女はこちらに遠慮している そう考えた俺は、アベルの考えを尤もだと受け入れる事にした。

「当然の結果です」

そう言っただけ胸を張る彼女は、素なのか演技なのか微妙に嬉しげで、そんな姿をほほえましく思う反面、それもこちらを従属させる方策の一つなのかも知らんと、背筋に、微妙に冷えるものを感じたり……。

とにかくそう言った流れで俺は、二人にはE×Gと生機融合措置の仮想データと、被検体に必要な要素に関する技術情報への閲覧権を許可、補助&監視用にそっち系の技術を持つAIを一人廻すと、

その間にボルフォッグ及びポルタンとの交渉その他を行う事になった……。

・
・
・
・

……のだが、俺は現時点ではまだ、自分〃獅子王凱と言う現実に充分に適応できているとは言いがたく、特に、彼を隊長と慕う勇者達に会うには、少々心の準備が足りていない。

そんな訳でボルフォッグは後に回し、先にポルタンと会う事にしたのだが……正直、フードの下の彼女との初見は、履いてない幼女初登場時の衝撃に勝るとも劣らぬものであった。

まず、先入観で男だと思っていたポルタンが、実は女性であったことが一つ。

そう言えば彼女は、増殖時、破壊したボルフォッグを剣先に突き立てトロフィーの様に掲げて歩いていたが、コレはやはり、赤の星の女性〃Sの公式によるものだったのだろうか？

そして、二つ目の衝撃が彼女の姿。

赤紫の、胸元が大きく開いたスーツを纏う浅黒い肌に長い黒髪の彼女は、その、ガガガのキャラデザである木村画伯がぱにつくちゃんと言う作品にデザインしたキャラクター、とらぶるちゃんに非常によく似ていた。

そう、腐ったラブコメに始まりアウターリミッツで終わった、今時そんなの誰が覚えてるんだなゲーム。

そのオチがなんだか今の俺の状態に奇妙に符合する気がして、非常に嫌で嫌で嫌なあのぱにつくちゃんである。

酷いアニメと腐った内容、ソレにそぐわぬ超展開エンドと、三拍子揃ったあの糞ゲーは、なけなしの小遣いでソレを買ったまだ若き

日の俺の心に深い深い亀裂を残したのだが……とまあ、それはどうでも良い。

気になるのは、木村画伯特有のお前それ絶対服のサイズ間違ってるだろなぱつつんぱつつんの巨乳　では勿論なく、共に行動する可能性が高い者の名としてポルフォッグを挙げた時の彼女の反応だった。

「……了解した。」

彼なら申し分ない」

殆ど表情の変化もなく、現状と任務を淡々と受け入れた無口な彼女が、彼の名を聞いた瞬間、見せた余りに攻撃的な微笑と、『彼なら申し分ない』そう言いながらの色っぽい舌なめずり……。

『……もしかしたらこの人、気に入ったものとかは壊れるまで遊んでしまう人なのか知らん』

それらを見た瞬間、俺の中を、こう、そんな非常に嫌な予感が走った。

走った、のだが……。

『けど、今更交渉もせず、ポルコートには変えられないよなあ』

既にアベル達には、ポルフォッグと交渉する事を伝え、躯体製作用に人格移植時のサンプルデータから取得した犬神霧雄のジーンデータを引き渡している。

ソレを、ただの勘を根拠にやっぱり無しとはいえなかったし、それに、ほら、ポルトンのあの反応も、『GGG Finalにおける激闘を経て……』とか、『同じ狼系忍者キャラとして同属的に……』とか、そんな風になにか感じるものがあっただけなのかもしれない。

それに、ボルフォッグの方も結構負けず嫌いっぽいので、案外、雨降って地固まる式に良いコンビになるんじゃないかとか思えないこともない……等と、グダグダ言い訳染みた樂觀要素を探しては見ただものの、そんなものを幾つ連ねても、悪い予感が増えこそすれ晴れる事は決してなかった。

むうと唸り、しかし、このままこうして居る訳にも行かず、俺はやがて諦める。

『……仲間？ 同士殺しあったりしないでくれれば、後はどうでもいいやな』

死ななければ、幾らでも再生できるわけであるし、ならば逆転の発想、納得いくまで殴り合わせれば良いのだ。

俺はそう割り切ると 命令待ちか？ 無言こちらを見るポルタンへと視線を戻す。

そして、そんな彼女の無表情に、何故か微妙に浮き立っている様な印象を受け、軽い溜息を吐いた。

『ま、別の意味で食われるなら、俺が『モゲロ』と一言言えいいだけだし、問題はないか……』

流石に一言、彼女に釘を刺しておこうかと思っていたのだが、なんだか下手な口出しすると、犬に蹴られて痛い思いをしそうな予感がある。

具体的に言えば、ガンドーベルに撥ねられるとか 俺は、ボルフォッグのためにもガンマシンを創る時はセキュリティを強化しておこうと強く心に誓った。

何せボルフォッグは、合体後に両腕となるメカに裏切られて負けそうになったと言う前代未聞の勇者口ボ。

そんな彼が、そんな目にあわせた相手と組んで行動するのだから、

その程度は当然の氣遣いであろう。

胎児である今の俺にこれだけの人格が並列できている現状で判る通り、素のGやラウドと比べ高機能化して融通が利くE×Gを使えば、多少セキュリティが重くなっても、充分以上に元が取れる計算になる。

『小型だし、使い勝手が良さそうなんだよな、ガンダーベル』

そのうちきつと自分用に魔改造してやると、俺は投げやりに呟いた。

そうして俺は、ボルフォッグとの交渉に移る……心算だったのだけれど、流石にそろそろ演算力が足りなくなってきたので、まずはポルタンに一言断り、彼女を『停止』させる。

俺自身、パルパレーバ、アベル、名無しのAI、環境プログラムそんなの勇気で補えばと吠えられる人達ならともかく、凡人の俺がE×Gから引き出せる演算力では、それに＋一名程度が限界のようだった。

まあ、この体がまだ胎児の状態で、体重的に本来の能力の1/10にも達していない可能性がある事を考えれば、充分どころか過剰すぎる能力といえる。

『少なくとも俺には、惑星復活以外にこれを有効活用する方策を想像できないしな……』

本当にそうなるとわかっていれば、もっと身の丈にあった能力を選択したのだけれど俺は、椅子に座ったまま動きを止めたポルタンを椅子ごと不可知化すると、入れ替わりボルフォッグを呼び出した。

人間サイズのボルフォッグが目の前で椅子に腰掛けてるのは、ソレがコスプレでは出しえない現実感、重量感もあって非常にシユ

ールな光景である。

俺は、そんな異様に気圧されぬている事実を悟られよう、自己に仮想空間の管理者権限を使用すると、目の前のボルフォッグに正対した。

そして、人格プログラムを起動……忍者ロボが目を開く。

「むっ、ここは？」

……貴方は一体、何者ですか？」

そして目覚めた彼が初めにしたことは、椅子から飛びのき臨戦態勢を整える事だった。

武器こそ取り出さないものの、油断なくこちらを見据えるそんな姿は、泰然とした遊星種たちと比べ対照的で……しかしこちらこそ生物として当然あるべき姿と感じるのは、彼らの戦いを知っているからだろうか？

「一体何の目的で、なぜ隊長の姿で私に接触したのです！」

返事をしない相手に不審を感じたのか？

誰何の声に疑念を連ねた勇者の姿に、俺は ああ、ダメだ
そんな風に思った。

勇者の姿に何かを感じ、しかし、表情は動かない 当然だ、操
作している それではダメだと、俺は自己を恥じて干渉を切る。

『なにやってんだろな、俺……』

やはり自分は勇者ではなく、何か障害があると直ぐに安易に逃げ込む小心な凡人に過ぎないようだ。

逃げてはいけない選択がある そんな風に思ってからまだ半日
と立っていないのにも関わらず、極自然に逃げを選んでいた自分に、

俺は内心自嘲しつつもソレを面には出さないように、出来るだけ自然な笑顔を彼に向けるよう心がけ、こう口を開いた。

「始めまして、ボルフォッグ。」

俺の名は獅子王凱、好きに呼んでくれて構わない」

しかし、その時そう告げた瞬間、俺の表情は、多分、相当に複雑な物だっただろう。

勇者を前に、俺の心情はそうと断言できるほどに揺れていて、顔筋の伝える感覚もまた 後で筋肉痛になりそうだな 心の中にある自分のどこか冷静な部分で、そう苦笑交じりに論評できるほど……。

けれどもそれでも、俺は自分の表情で彼に向き合うべきだったのだと、この判断は正しかったのだと、そう心で感じながら言葉を続ける。

「ボルフォッグ、君をここに呼び出したのは……俺の、俺たちの目的を手伝って欲しい」

言ってから気付く、奇妙な言葉使い。

警戒から緊張が強くしていたパルパレーパや、アベルと相対した時よりも、ボルフォッグに声を掛けている今の方がはるかに失敗が多いのは、やはり自分が勇者と言う存在に安心を抱いているからだろうか？

『……情けない話だ』

異常な状況に思った以上に心が疲弊していて、それが勇者と言う存在がもたらす安堵に縋り付こうとしているのだろう。

俺は一つ、大きく息を吐くと、鋼の顔に雄弁な怪訝を湛えるボル

フォッグへと己が両手の甲を向ける。

「……言わずとも判っているとは思いますが、俺は、貴方達の凱隊長ではありません。」

ですが、俺はあなた方の分類ではエヴォリユダーに類する、獅子王麗雄、絆夫妻を両親に産まれた　いえ、産まれる　一人の間、獅子王凱です」

そう言っ て俺は、全身を走る電子基盤めいた緑色の光と、両手の甲と額　緑のラインの収束点に存在する、『G』の紋様を示した。

「なんと……」

彼らの敬愛する凱隊長のそれと比べ、遥かに緻密で複雑な紋様を描く光と、視認できる範囲だけでも三つが存在するGの紋章、それを目の当たりにしたボルフォッグが驚きの声を漏らす。

「それからもう一つ、体のサイズに関してですが……ここは俺の創った仮想空間で、貴方の体のサイズは俺たちのそれにあわせて有ります。」

私が大いいのではなく、貴方が縮んでいるのだと御理解ください。仮想空間の表層的な設定の幾つかは、貴方にも干渉できるように設定していますから、多次元リンクシステムでそちらを覗いて頂ければ判りやすいかと思います」

そう、前置きして俺は、彼への説明を始めた。
極力情を省いて、無駄な手間を掛けないように　でないと縋ってしまいそうだったのだ、目の前の勇者に。

彼らが断るわけがない、彼らなら助けてくれる、胸に自然、そんな思いが湧き上がり、だから俺はそう言う形で心を抑えるしかなか

った。

『だって仕方ないだろう？』

ただの凡人が一人、こんな気違い染みた状況にあって、目の前には大好きな物語の、間違いなく自分を助けてくれるだろう、そう確信できる勇者がいるのだ。

『……けど、縊る訳にはいかないんだよな』

俺は、既にアベルとパルパレーパに豪語している。

白の惑星を創ると、その上で望むのなら三重連太陽系復活に協力すると……にもかかわらず、勇者に出会った瞬間白旗揚げて無条件降伏など、俺がいかになににちっぽけな肝と矜持しか持たぬ凡人であろうとも選べる選択ではない。

「……俺達の目的に賛同しろとも、協力しろとも言いません。

俺は、貴方の返答がどうであれ、貴方々GGG機動部隊と本来の姿のペイ・ラ・カイン、ジェネシク・ガオガイガーを再生し、この世界に解き放つ予定ですから……ですが、もし望めるのであれば、こちらをより近くで監視する、そのような心算でも構いません。

どうか俺たちに手を貸してはくれませんか？」

俺は淡々とそう説明を締めるとボルフォッグに向けて頭を下げた。因みに、機動部隊再生の件は全て本気で、もし彼らが味方にならなかったとしても、その存在は俺が遊星主に寝首を掻かれたり、この能力を必要とする何かが起きた際の防波堤として、非常に有用だろうと考えている。

『流石に、凱“隊長”や宇津木命を再生する気はないけどな』

実は俺のデータベース、サイボーグやエヴォリユダー、機界新種等も文明の所産の分類に入っているらしく、その気になればソルダート部隊やアルマ、ゾンダリアン……それどころか、チャンディーや尊者ヤクスギ、モーディワープのオフィサーと言ったベターマンの登場人物まで再生可能だったりする。

流石に、機界昇華を受け吸収され消えた人達までデータが残っているわけではないが、将来的には、ゾンダリアン化され宇宙で機界昇華の尖兵となっていた人達を普通の人間に戻し、新しい星の成員として初期段階における社会形成に役立ってもらう心算だ。

その反面、ガオガイガーやベターマンの、物語の登場人物 例
えば、凱隊長やソルダートJ等 を再生する気は現在の俺には全く無い。

『ベストマンならぬエヴォリユダー・ヤクスギとか、すっごい惹かれるものがあるけどな……』

素で東方先生に準えられる、宗教的、オカルト的な方面から生命の真理に近づいた超人、尊者ヤクスギ。

記憶を失い、意識の混濁した状況においてもチャクラの導きに従い邪壊思念と戦い続けていた彼なら、新しい惑星の維持・運営にも大いに役立つのだろうが、なんと言つか、彼らの物語を愛する人間として、その生と戦いとを全うした彼らを『蘇らせる』事には抵抗があるのだ。

じゃあ、遊星種は、勇者ロボ軍団はどうなのだと問われれば、彼らはメカであつたり、そう言った存在であつたりするから抵抗が薄いだけで、本来そうしてはいけないのではないかと言う意識は、確かに俺の中にある。

まあ、強大過ぎる能力をポンと持たされた凡人としては、憧れた者達の前で醜態を晒さない為にも歯止めは絶対に必要なるわけだか

ら、よほどのことがない限りこの一線は越えないようにしたい所だ。

『……いや別に、オリジナル凱の登場が恐ろしいわけじゃないぞ、うん』

そんな事をつらつら思いつつ、ボルフォッグを見据えたまま彼の返答を待つ。

「……二・三、質問したい事があります。」

そんな俺に、こんな言葉が返るまで、主観ではずいぶんな時を待ったような気がしたのだが、客観的なそれは数秒にも満たぬ物だったようだ。

どうやら多少は、こちらの要望を受け入れる体制になったらしい彼に、俺は頷き席を促す。

なお、情報によって仲間達を守る諜報の役を任された彼の、質問が二・三で済む筈は当然なく……だから、俺がその全てに答え終え、彼が納得し協力を約してくれるまでには客観でも相当な時間を費やす必要があった。

衝撃！ 紫の忍狼 ボルフォッグ&ボル…た、ん？（後書き）

因みに、主人公は発売直後に定価で買った設定のぱにつくちゃんですが、筆者は一年くらい後にワゴン価格で購入しました。

ギャルゲだと思ったらアウターリミッツだったという評価にSF者の心をくすぐられました……。

最初から評価を知った上でやる分には、中々面白いソフトだと思いますよ。

胎児の見る仮想現実（ユメ）！ 俺と彼女と……ソンドリアン？

「ボルフォッグ、貴方には早速、護衛及び情報収集活動に入って欲しい…… といいたい所なんだけど、実は未だ、君の新しい体が仕上がっていないんだ。

それまでの間、これを手伝って欲しいんだけど、頼めるかな？」

「こ、このデータは……」

「……ソール十一遊星種、ペイ・ラ・カイン。

彼を本来の形に修復する手伝いを、君に頼みたい」

．．．．．

そんな訳で、遊星種と勇者、双方から一応の協力を取り付けて、早一カ月の時が過ぎた。

一ヶ月…… といえば早かった期間が短いのか長いのか、多少微妙に思える程度の時間ではあるが、俺の場合、未だ碌には体を動かさせぬ とは言え、将来の為のその一で、今から計画的な訓練を行っているのだが、オートで 胎児の身に加え、その意識を人の脳とは桁違いのEXGの演算力に依存し、活動の場を仮想空間内としている為に、主観時間では既に半年近い時が過ぎている。

なにせ、この一ヶ月で俺の体重は1.5倍、複数の石の連動共鳴によって重量比以上の能力向上を見せている見せていた それこ

そ、この身一つで惑星の改変が可能なのではないか、そんな思いが湧いて来る程に。

『ま、仮にド素人が一人で改変した所で、絶対に碌な事にはならんがな……』

そんな訳で、ここ一ヶ月程、俺は能力掌握とそれを用いる為に絶対必要と思われる知識の修習、勇者ロボ達との交渉等に努めていた……のだが、それを短く感じたのは、ぶっちゃけ前二種が非常に過酷な物だったからだろう。

「……さあ、今日も始めましょうか」

と言うのは、俺を精神的に屈服させる為の方策の一環と称し、教師役を買って出たアレが、見た目通りの非情な全裸DS幼女だった為で、丁寧に、婉曲に、見下した目で放たれる全く暴力的ではない言葉の数々は、ただの学習を非常にスリリングな時間へと変えていた。

例えば、俺を見上げるのは屈辱的だとか言って背の高い椅子スツール

初見時、幼児用椅子を連想し噴出しかけた　に腰掛け、しかし、服装は薄絹一枚纏っただけのあの姿で、彼女は事ある毎に足を組み変える。

そして、その慎みに欠ける姿に目を背ければ腰抜けと、注視すればロリコンと俺を蔑むのだ、彼女は……。

一事が万事この調子、事ある毎にこちらが下だと、そう刷り込み続ける彼女には正直閉口するのだけれど、こちらは教えを受けている身、協力を仰いでいる身で、その教え方に注文を付けられるような立場でもなかった。

それに彼女、色々と問題はあるのだけれど、教え方自体は上手いのですよ。

勿論、生機融合体としての能力とか、与えられたデータバンクの優秀さとか、そう言った要素もあるのだけれど、それだけではこれだけ長い間、密度の高い学習を続けられはしない。

何と言うか、さすが元政治家？と言うか、人の操り方が、こちらの意識の緩急の取り方が巧いのだ。

まあ、俺が単純だとか、着々と調教が進んでいるとか、そう言った気もしないでもないのだけれど、とにかく彼女は、それだけの成果を上げている。

「なるほど、どうやら愚鈍な貴方にも、ようやく下地は出来てきた……といった所ですか」

そして、そんな俺の成長具合は彼女にとっても満足いく物だったようだ。

珍しくもその口元を、冷笑以外の形に綻ばせ、レポート片手にそう手放しに いや、普段の彼女と比べれば、これでもそうなのだらめる、そんな少女の姿を見据え、俺は自分も綻び掛けた口元を、意識して引き締めた。

因みに、脚の長い椅子と全裸足組み換え問題については、こちらがその都度、机とスツールの高さとを、互いの視線が会う位置に調節し直す事で克服済みなので、俺の目がやばい所に視線を向けてしまっ心配は既にある。

とにかく、ここで意識を緩めたら、彼女は恐らく、調子に乗っていると責めて来る。

「そろそろ何か、ご褒美をあげても良い頃合なのかもしれませんね」

そう判断、極力平静を保……っていた筈の俺の心の隙間に、彼女の言葉と流し目とがするり、滑り込んだ。

一番初めに思ったことは、彼女はナニを言っているのだろっ、そ

んな疑念……。

極論、ここは俺のモノなのだ、彼女自身も含めて。

彼女に俺に上げられる褒美など何一つ、ない。

俺が手を加えたら消えてしまっ、彼女自身の心を除いて。

そんな状況で、彼女は一体ナニを与えるというのか？

「はあ？」

オマエは何を言っているのだ？ 俺がそんな表情で呆けてしま

ったのは無理もない事だ。

まさか彼女も、良く出来たといって頭をなでるとか、そう言った
ご褒美を言っているわけではあるまい。

『知識 いや、それを活用する知恵か、それでも提供してくれる
というのか？』

彼女の持つ物造りのセンスは、なにかで代用できるものではない
けれど、彼女はそれを既にくれている。

そもそも彼女が、俺に物を教えているのはほんの片手間で、それ
以外の時間は、パルパレーパや、漸く修復なったカイン、ペイ・ラ・
カインと共に、ボルフォッグ、ポルトンの体の開発を行ってくれて
いるのだ。

そりゃあ、それは互いの利益あつての話だけれど……呆けた思考
の裏でそんな事を考えた俺に、アベルはやれやれと肩を竦めてみせ
る。

「困ったものですね、ちょっと褒めたらもうこれですか……。
貴方は、名目上とは言え私達の統率者なのでから、もう少しは
しっかりしてもらわないと困ります」

そうしてアベルが続けた言葉に、俺は今度こそ目を剥いた。

「な、なんで、俺が統率者なんだよ？」

「なにをお馬鹿な事を言っているのです。

私達、元々敵だった者同士を、曲がりなりにも繋いでいるのは、貴方なのですよ」

確かに、遊星種のリーダー格はアベルだが、パスQマシン絡みの一件を考えても、勇者達が彼女の判断に大人しく従うとは考えにくい。

同じく、アンチプログラムであるカインを上に乗る遊星種もカイン修復にボルフォッグが関わった為、勇者達は彼を信用している。いないだろうし、そもそも勇者軍団には端から指揮官級のメンバーが欠けていた。

「……ああ、確かに俺しかないのか」

正確に言えば、カインとアベルの間に立つて、調整を行う立場になるわけだが、名目だけでも俺が上に立たないと、二つの集団が協力して事に当たるのは難しいだろう。

「大体、何当たり前の事を聞いているのですか、あんな荒唐無稽な夢を掲げて私達を墓場から引き摺り出した人間が、それでは困るというものです。

……これは、今までの私の教育が優しすぎたと言う事でしょうか？」

溜息と共に恐ろしげな言葉を吐き出す少女の姿に、俺は背筋を走る冷たいものを感じた……が、確かに今のはどうしようもなく愚か

な問いだった。

「どうにも俺は凡人だから、皆に迷惑を掛けない程度は厳しく躡けてくれるとありがたい」

だからと素直に頭を下げると、アベルは処置無しと言った風に鼻を鳴らした。

「ふん、貴方の様な人間の事は、凡人ではなく馬鹿と言うのです。周囲に合わせて埋没できない人間を、人は凡人とは言いません」

お前は凡人ですらないと、そう突きつけてアベルは、しかし微かな笑みを零す。

「しかし、その馬鹿の気宇壮大な戯言のおかげで、我々はどうして復活する機会を得られました。

その点には素直に感謝しておきましょう」

そうして、呆気にとられる俺に背を向けると、こつ言葉を連ねた。

「それから、御褒美の話ですが、これをどうぞ、貴方に差し上げましょう」

そう言って彼女は、自分用のプライベート領域　流石に無いと不便だろうと設定した物だから、一本のメモリーを取り出した。

「とりあえずは、ラウドJジュエル…とでも呼んで置きましょうか。ラウドGストーンと、与えられたEXGのデータを基に、Jジュエルの基礎性能を上げたものです。

多少ではありますが、Gストーンとの互換性も向上していますか

ら、Jの力が必要な時は、データをこちらに入れ替えて創造するといいでしょ」

背中越しに投げ渡された物を、開いてざっと覗いてみれば、中身は言われた通りのJジュエル。

ただし、ラウド系調整技術の導入、当時の赤・緑両星と比してより高度な製造・加工技術を前提とした構造の精密化により、その基礎能力は格段に向上しているようだ。

『平均発揮はラウドと同等以上、そこから更に、オリジナル級の天井の高さがあるわけか』

ざっと、シミュレーション内のデータを検証し、俺は感嘆の意を込めて息を吐く。

「凄いな、躯体製作の合間に、これだけのモノを作り上げるなんて……」

恐らくは、俺にモノを教える片手間に作業を進めていたのだろうけれど　俺は一頻り感心すると、しかし、と首を傾げた。

「……けれど、何故これを今？」

真面目な話、滅ぶ直前の青の星と三重連太陽系では、技術レベルに相当な開きがある。

主観時間で半年近く、それも、アベル、パルパレーバ、カインの三人がチームを組んで尚、ボルフォッグとポルトンの躯体が完成に至っていないのも、試験的に導入を決めた新技術の調整に手間取っているからであった。

複数個のEXGの同調共鳴による能力向上と、それに量子通信技

術を絡めた、距離無制限の遠隔同時存在機構　パスQマシンの暴走で、物質復元装置の傍らに地球が創造された事、複数創造された遊星種が見事な連携を見せた事等で判る様に、近い技術は三重連惑星側も所持していたのだけれど、だからと導入を決めたそれを形にするだけの為に、三人はもう一年近い時間を費やしている。

如何にアベルが天才であるとは言え、Jを改良してその技術の精華であるExGに迫るまでには、相当な時間が必要となるのではないだろうか？

そんな疑問にアベルは、彼女には珍しく困ったような微笑を口元に浮かべた。

「……正直な所を言わせて貰えば、もうGストーンには懲り懲りなのですよ」

時間的制約から、供与を受けたラウドGストーンをそのまま使わざるを得なかった遊星種達は、それ故にジェネシクを天敵とし、その力を手にしたGGGに敗北している。

「コアぐらいは手ずから作り上げたものを使いたい。それがそんなに奇妙ですか？」

そもそもアベルは、明確な弱点を持つラウドGストーンを長期的に使い続けるリスクを許容してはならず、遊星種製作中から、折に触れそれに変わるもの、改良型Jジュエルの開発を進めていたのだそうだ。

「元々、アルマの設計を流用したこの体とラウドGストーンではマッチングに多少の問題もありましたから、これを機に改良しようとも考えています」

そのせいもあって、私には専用メカノイドボディを用意できなかったわけですし、そう言葉を締めた彼女に、俺はふむと頷く。

「……わかった。」

ボルフォッグとポルトンの物質化が終了次第、E×G関連の知識を持つAIをそっちに廻すよ。

細部データに関しては、こっちで編集を終えるまでちょっと待ってくれ」

彼らへのデータ供与中にわかった事だが、この体の中にあるデータ量は、実際にはそれほど多くはない。

いや、非常に多いのは確かなのだが、俺が閲覧できる全データ量と比べればすずめの涙、赤の星、紫の星関連など青の星で入手し得ないデータは全く含まれてはいない上に、検索、編集速度も俺が直接閲覧するのと、体内に間借りする者達が行うのでは雲泥の差が生じるのだ。

コレは恐らく、あの時の要望で後付されたデータベースが、この体の機能とは別系統で存在する為なのだろうが、そのおかげでデータの閲覧、編纂は常に俺の仕事になっているのがなんと……。

まあ、そのおかげで、彼らが自前の物質創造装置その他を構築し終え、この体からデータをぶっこ抜く事に成功しても利用価値が維持できるのだから、悪い事ではないと思いたい。

『おかげで、助手的な作業にも随分馴れたしな……』

そんな事を思いつつ、ラウドJのデータを閲覧不可領域に放り込むと、データベースを確認したのだろう、一瞬表情を固めたアベルがくすり、微かな笑みを零した。

「……あれだけ罵しられているというのに全く態度を変えない、貴

方のその愚鈍なまでのお人よし具合には、正直、感心しますよ」

全く虐め甲斐のある　そんな最後の言葉は聞こえなかったことにして、俺は彼女にこう尋ねる。

「それで、二人の躯体には後どれ位かかりそうなんだ？」

「既に、ほぼ完成しています。

後は細部の調整を残すのみですから、もう後僅かで仕上がるでしょう」

「……ガンドーベルは？」

多用途で、大きすぎず、隠密系能力を備えるガンドーベルは、最初に外に出る二人の足として物質化されることになり、その流れから勇者達、原種達に付加する新しい機能のテストベットとしても扱われていた。

実際に使われる機体は、実用性を考えそれ程魔改造されているわけではないのだが、それでも、EXG主体のシステムへの転換、それによる出力向上と構成素材の刷新、空力と攻防をかねたGパワーバリアの追加など、元の機体とは別物といっていいほどの性能向上を果たしている。

「こちらには生機融合処置は施しませんし、後から幾らでも改良を施せますから面倒な事は何もありません。

既に充分仕上がっていますよ」

その結果、機体の製造難度も飛躍的に上昇してしまっていたのだが、その辺りは問題ではなかったようだ。

となれば、もう二人の出立は秒読み段階と見ていい。

「……じゃあ、資料編纂は急いだ方が良さそうだな」

「ええ、急いでください。

可及的に速やかに……」

何の気なしに漏らした一言に、彼女は更なる研鑽を要求する答えを返し、更にこう言葉を連ねた。

「それから、現在の作業が終了してからの予定なのですが……」

「とりあえずは、それぞれの躯体の製作……だろ？」

遊星種や勇者ロボの能力はそれぞれ異なるから、それに合わせた体を誂えなければならない。

その上、その能力のそれぞれに導入できるだろう新理論、新技術が多数存在する為に、一体創る毎に基礎研究から始めなければならなくなる始末だ。

こちらに、この体の製造元の最先端の技術を保有するAIが存在する事や、躯体製作に当たる者達が、Gの力で人を超えた各々の分野の『天才』ぞろいである事など、こちら側の能力・設備もまた常識を超越している為に何とか形にはなってはいるが、そうでなければ、主観時間でたったの半年程度、遊星種のラウドGストーンをE×Gに挿げ替え、躯体にそれに合わせた改修を施す程度ですら困難だったはずだ。

だから、これからやることは山積みの筈　そんな思いから問うように答えた俺に、しかしアベルは首を横に振る。

「……我々を一体なんだと思っているのですか？」

既に、躯体、メカノイド共に、中核部分を製作するのに必要なノ

ウハウは、充分手に入っています。

そして、私の様な一部例外を除けば機能の多くは外付けですから、ただ全員分の躯体を作るだけでしたら、技術的困難は殆ど残っていません。

それに、これからどう動くにせよ、暫くは二人からの情報待ちなのです。

焦って何かを作るよりは、今は技術解析と基礎研究とを進めるべき時でしょう」

そう言って彼女は、ですが…と、言葉を続けた。

「貴方も一々手を引いてやらなければならぬ段階は脱したようですし、ご褒美と言っておいて結局こちらのほうが多くを貰っているのでは、私の沽券にも関わります。

それ以外にやって欲しい事、やりたい事があるのでしたら、片手間でもよろしければお手伝いさせていただきますが……」

つまり、自分で何かやってみる、指導はしてやると言う事だろうか？

確かに、俺みたいな凡才が、高々半年天才科学者に師事した程度で、何かを作り出せるなんて本来ならばとても考えられる事ではないが、この体と俺専用データバンクのチートスペック、AIのサポートを考慮に入れば、アリモノを組み合わせる程度なら何とかなる可能性はある。

「……一つ、あるかな。

俺たちの体とは別系統の躯体を一つ、作りたいんだ」

暫しの黙考……俺は、データバンクから資料の山を取り出すと、二人の間のテーブルの上に積み上げた。

「別系統……ですか？」

その一番上に乗った試作型メタルサイボーグの資料を手に取り、アベルが怪訝な顔をこちらに向ける。

「ああ、なんて言うか、俺たちの顔としてこの地の人間の前に姿を現す時用の体が欲しいんだ。

産まれてから十年位は俺もそんなに単独行動できないだろうし、その間の端末をかねてね……」

胎児の状況を脱しても赤子、赤子を脱しても幼児、幼児を脱しても……と、俺がまともに活動できるようになるまでには最低でも十年以上の時間が必要だ。

その間俺が使う端末にくたいを用意しなければとは、前から思っていた事である。

尤も、前にも述べた通り、俺の中には元々、AIを物質化する時に使う 尤もこれは、生身の肉体に全く変わらないものなのだけ
れど 躯体のデータが多数存在したので、今まではその一つにE
XGのコアを埋め込めばよかうと考えていたのだけれど、どうやら状況に余裕があると聞いて欲が出たようだ。

一から端末を作るのであれば、特化型の多い仲間たちの間を埋め、本体の想像能力を大きく活かす事が可能な汎用性・拡張性が高い物が望ましく、露見した際に本体や仲間との繋がりが辿りにくければ尚良い。

例えば、見た者がこれは人の形をしてはいても地球上の生命ではないと、そんな風に直感できるような……。

「……それで、ゾンドリアンのデータですか。

それに、ずいぶん旧式なサイボーグボディ、最後のこれは見たこ

とがないデータですが」

「ああ、サイボーグの方は、地球で作られたZ・G混成仕様のサイボーグボディ、メタルサイボーグのデータ、もう一つは機界新種、一例が確認された、GやJの力に適応すべく進化した原種を超えたゾンダー、こっちは参考用だけだね」

ZとG 対立する相容れないモノの様に思われている二つだが、Zの分析から生まれた肉体と、擬似GSライドの心臓を持つメタルサイボーグの存在を見れば、それを構成する技術自体は両立可能である事は明白だ。

「……自在に変形し、物質との融合能力を持つGストーン生機融合体^{ゾンダー}、ですか……」

「ああ、幸いゾンダーメタル開発時のデータや、その元になった植物と機械の融合技術、メタルサイボーグの開発データ、この体を製造する際のマスタープログラム解析データもライブラリには揃っているから、高い性能さえ求めなければ不可能ではないと思う」

仮に現在の俺には不可能でも、最もゾンダーの特性を色濃く残すプロトタイプのメタルサイボーグを調整しなおし、生機融合処置を施せば、それっぽい端末は製作可能だろう。

何か気を惹かれる資料でもあったのか、ふむ、彼女は目を資料に落としたまま形良い顎に手を当てると、その口元に微笑^{えみ}を浮かべた。

「なるほど、中々面白そうなテーマです。」

これに関しては、私も全面的に協力させていただきましよう」

そして、続け放たれたアベルの言葉に、俺は驚き眉根を寄せる。

「……全面的に？」

尋ねる俺にええと頷き、彼女が両手を横に広げると、その背に恐らくは赤の星の住民の持つ特性なのだろう　孔雀の尾羽のような形をした赤い光の翼を広げた。

「貴方もご存知の、私、パルス・アベルの固有能力……」

言葉と共にふわり、アベルの体が宙に浮き上がると、その次の瞬間、纏う薄絹の前面が大きく跳ね上がる。

それに驚き、身を投げ出すのとはほぼ同時、彼女の前面隈なく生えた無数の巨大な銃身が、一瞬前に座っていた空間を貫いた。

「……収束念動パルス砲」

廻り込んだアベルの側方、身構えた俺がそう呟くと、彼女は恥ずかしげも無く生白い脇と横腹とを晒しながら　そうです　こちらに流し目をくれる。

天才と言う存在はやはり紙一重な物なのか、或いは、赤の星ではこれでも普通の範疇にはいるのだろうか？

通常の神経ではとても使いこなせないだろう兵器を展開した痴女同然の姿を誇示する幼女の視覚的破壊力に、俺は内心頭を抱えつつ、ざっと仮想空間の管理プログラムに目を通した。

プログラム本体やその設定に改竄の形跡がない事を確認して初めて、彼女の姿から目を逸らす。

『しかし、何でこんな事を？』

彼女の言動に、原作におけるパルス砲　　念動力を収束・固定し

打ち出す兵装　展開シーンを連想し、持ち前のヘタレさから反射的に逃げてしまったワケが、現実には俺がこの仮想空間を掌握している限り、中で誰かが傷付く事などそもそもあり得ない。

いや、この仮想現実はシミュレータの類も兼ねているので、設定を変えればそれも可能なのだけれど、傷付けたとしてもそれはあくまでも仮想の物でしかないのだ。

『俺の反応でも見ていたのかね？』

時折、彼女はこちらを試すと言うか、反応を見る様な事をしてくるから、これもその一巻ではないかとはおもうのだが、俺なんぞ脅かしてナニが楽しいのだろうか？

『まあ、外見だけはエヴォリユダー・ガイだから、多少溜飲は落ちるかもか』

そんな事を考えながら溜息を一つ、なにがしか言ってやろうと、視線を背けながら目の端で窺うと、彼女はこちらに向けていた小さな掌を銃の形に変えた。

「パルス砲の移植は、時間的余裕の少なさから未だ改良の余地を多く残しています　例えば、全て出すか一つも出さないかのどちらしか出来ませんし、出せる方向もこの通り、前方に固定されています」

そしてバンと、仕草だけそれを撃って見せるが、当然指鉄砲から何かが放たれる事はない。

「もう少し時間があれば、こんなお馬鹿な姿を衆目に晒さず済んだのですが……」

そう、彼女は口から驚愕の新事実を撒き散らしながら椅子の上に降り立った。

どうやらアベルは、自分の姿の痛さをちゃんと理解していたらしい。そんな意外な事実に見つ白けになった俺の目の前で、彼女は銃身を消すとテーブルの上に積み上げられた資料の山に手を伸ばす。

「……とまあ、そう言う訳です。」

この状況では、余り自分の趣味に感けている訳にも行きませんし、既に個人的な研究として「ジュエルの改良を進めていましたから、今回の貴方の提案は渡りに船だったというわけですよ」

元々、ファイナルの彼女は責任感やらなにやらが暴走した姿だと言っ説があつたが、なるほどアベルは、俺が思っていたよりずっと、責任感が強い人間だったようだ。

「……原状、余裕があるようだし、その位別にいいと思うんだがな」

そして、そんな彼女であれば、自分の趣味嗜好より性能を重視した事もまた宣なるかな……だが、そうなると浮かび上がるのがこの疑問である。

「なるほど、それは判ったけど、だったらなんでわざわざ目の前で実演なんかしたんだ？」

出来れば使いたくないんだろ、それ？」

自分の席に戻りつつ、それを素直に口に出した俺に、彼女は真顔でこう言った。

「まあ、ご褒美といった所ですよ、結局私の方が多くを貰ってしま

いましたから。

貧相で女性的魅力に欠けるこの体ですが、ロリコンの貴方なら見て嬉しいでしょう？」

それとも、まだ見たりませんか？　そう続けた彼女に俺は思わず『ちがわいッ！』と叫び、同時、灼焼する脳髓（Gストーン）のどこか冷たいところで、この仮想空間に音漏れの概念がないことに感謝したのだった。

天才！天災？ 蹂躪される世界とお兄ちゃん？（前書き）

7 / 30 の更新は休みます。

天才！天災？ 蹂躪される世界とお兄ちゃん？

……目の前で前髪メッシュの美形集団が寛いている。

設定された広間の片隅で、休憩中の俺は頭の痛い光景を目の前に、もつと頭の痛い報告書を読み込んでいた。

『……竜神兄弟の駆体用に、彩兄妹の遺伝子の使用を許可したのは失敗だったかな』

あれから凡そ一ヶ月、番の狼 ボルフォッグは全力で否定するだろうが が旅立ってから既に数週間の時が経過し、この体もめでたく胎児七ヶ月を迎えている。

成長を通常よりも僅かに早く設定したこの体の体重も、おかげで初期の二倍を超えて、その能力も制限さえかければこうして竜神兄弟 日・中・仏で、計六体の同系機が存在する建設機械型合体ロボ フルメンバーを仮想空間内に具現化できるほどになっていた。因みに、何でそんな事になっているのかと言えば、第一波として旅立った狼夫婦の工作により、第二波を外に出す準備がもう暫くで整うからで、俺はその報告を基に日本に溶け込みやすいメンバーとしてメイドインジャパンの初代竜神兄弟こと、消防車&はしご車型の氷竜・炎竜をチョイス。

その躯体製作をアベル、カイン、パルパレーパに加え、最近では雑用係から下っ端助手程度の仕事をこなせるようになった俺の四人で始めた……のだが、竜神兄弟を呼び出して面談を行うと、彼らは中国製の二代目龍神、風龍・雷龍兄弟、そして特にフランス製の三代目、光竜・闇竜姉妹との同時物質化を要望してきた。

まあ、理由は判らないでもない。

彼らは元々Aエプログラム、つまり、後天的な改竄が可能な存在だ。

遊星種との戦いに際し、洗脳されたガイやら【自分達の複製^{レプリカ}】との戦闘を経験している彼らが、それを行った者達とつるんでいる俺を警戒するのは無理からぬ話である。

本来なら、機動部隊全員と言いたい所を竜神シリーズで区切ったのは、同系機だから捻じ込める範囲だと踏んだのか、或いは、妹可愛さが昂じた結果か？

俺はそんな事を考えながらその要求に成る程と頷き

『それ自体は難しくない……が、外部で受け入れ準備を整えている^{ホル&ホル}諜報部隊の作業量が増える為、まずそちらに確認を取らねばならず、また、仮に了承を得られたとして、外に出てから暫くの間は生活に制限を受ける可能性が高い』

そんな率直な答えを彼らに返した。

すると何故か、青と赤の双子のロボットは、一瞬、一様に目を見開くと、転じて氷竜はなにやら優しい視線を、炎竜は笑いを堪える様な表情をこちらへと向ける。

「私達はロボットですから、待遇面はそれほど気にする必要はないのではと思いますが」

そうしてそう口を開いた氷竜に、俺は当然その首を横に振った。

「あー、いや、そう言えばまだ言っていなかったけれど、ここから実体化する時は、俺や遊星種たちのように生身の体で行ってもらう事になっているんだ。

だから、受け入れ状況や待遇の話は重要なんだよ」

まさか、女の子二人を着たきり雀で部屋の中に閉じ込めるわけにもいかないだろう？ そんな問いかけに、えっ……と思考を停止さ

せた二人に、俺が一通りを説明し終え、交渉を終えるのには結構な時間を要した。

いや、こちらの条件の殆どを何故か竜神兄弟があっさり受け入れてくれた為、最も時間を費やしたのは

「ところで、この体の元になった遺伝子提供者に、妹はいたのですか？」

光閻姉妹への血縁に拘って、提示した肉体へと不満を露にした二人への、説得を諦める迄に俺が要したその時間だったのだけだ……。

『……と言つか、あんたらどこまでシスコンなんだよ』

そんな訳で、データバンクから兄妹揃っている遺伝子データを検索して出力、提示した資料の中から竜神兄弟が選り出したものが、彩兄妹　ガオガイガーの監督による、同世界を舞台としたSFホラーアニメのヒロインと、その兄　のそれだったと言っわけだ。

正直言って、氷炎風雷の基となる彩　真理緒マリオは、細くて伶俐で前髪メッシュなロング美形キャラであり、どちらかと言えば重量級の竜神兄弟には不釣り合いに思えたのだけれど、まあ、見た目伶俐で冷静、内面はその逆な妹、火乃紀ヒノキの方なら竜神姉妹に近いイメージを持つていないこともないので、恐らく彼らは妹基準で遺伝子モデルを選んだのだろう……とまあ、そんな経緯があつて、今俺の目の前には人間の体に慣れる為にVR内で生活する前髪メッシュの美形集団がある。

因みに、ボルフォッグの時は犬神霧雄のそれに一切手を加えなかった俺達だが、流石に四つ子と双子では見分け辛い事、元々彩一族の髪が茶髪ベースで、前髪に緑と赤のメッシュが入るといとうどう考えても自然には存在し得ない彩色である事等から、遺伝調整で髪

色に手を加え、前髪を単色メッシュに変更、それぞれ色分けして一目で見分けられるように改変している。

アッシュグレイをベースに、氷炎風雷光闇それぞれの機体色、青、赤、緑、黄、桃、黒のメッシュを入れたその彩色は、オリジナル原型と負けず劣らずの奇抜さで、正直幾度か『そんな髪した人間がいるか！』と卓袱台をひっくり返す衝動に襲われたのだが、外にいる諜報班の報告によると、この髪の色はこの世界の人間には珍しくはあってもありえる範疇なのだそうだ。

『この世界、もしかしたらアニメかなんかの世界なんだろうか？』

登場人物の書き込み・書き分けに限度がある動画アニメの類では、ぱつと見見分けが付くように髪の色をカラフルにする事が良く行われるが、与えられた能力等を鑑みるに、これから俺が生まれ出でる世界は、そう言ったアニメか漫画、あるいは、それを意識した若者向け小説が元になった世界なのかもしれない。

『尤も、こうなると、もー原作なんてあつてないようなものかもしれないけどなー』

頭痛い集団を前に今一度手元の資料に視線を落とし、俺は重い溜息を吐き出した。

丁度開いていた部分　大手新聞の一面の見出しだ　には、木星無人探査船ジュピロス2の大きな文字が躍っている。

木星探査船ジュピロス1を初代とするジュピロスシリーズは、ガガ世界において、日本の宇宙開発公団により1990年代に打ち上げられた一連の木星探査船の名だ。

木星に宿っていた滅びの力『ザ・パワー』、その片鱗と思われる謎のエネルギー物質、ジュピターXを持ち帰ったジュピロス1から主人公、獅子王凱の母親である獅子王絆を乗せて遭難したシリーズ

最終の有人探査船ジュピロス5まで、ガガガ世界の地球史に大きな影響を及ぼしたこの一連の探査船が、なぜこの世界に……と、資料を目に通せば、どうやらコレは、ガガガ世界で世界十大頭脳の一人と讃えられた二人、獅子王雷牙、麗雄両博士の仕業であるらしい。

元々、人類の域を超越した感のある卓越した総合科学者であった両博士は、この体の父親とその兄であると言う関係性からこの世界に生み出され、原作通りの天才っぷりを発揮してこの世界の宇宙開発の前倒しを進めていたようだ。

『つーか、兄弟でノーベル賞、タイム新年号の表紙で仲良く肩組んでピースってナニよ？』

一昨年にあたる2012年に木星までの往還に成功、多数の資料を持ち帰った 流石にジュピターXは採取されなかったらしいがジュピロス1が世界に与えた衝撃は大きく、2013年のTIME紙新年号の表紙『Person of the Year』は、ジュピロス計画の主導者である両博士が飾っている。

しかも、なんで宇宙開発予算はお寒いばかりの金欠JAXA尤も、この世界では雷牙博士の所属するNASAとの共同計画だが、ジュピロス計画なんぞを推し進められたのかと言えば、コレがまた極め付けに頭痛いことに、その資金源の多くは獅子王麗雄の個人特許なのだ。

つまりアレだ、ガガガ本編よろしく世界の技術史を塗り替えるような発明をしまくった麗雄・雷牙両博士が、その莫大な特許権使用料を自分の研究につき込み、それでまた研究が進み発明しと、凄い勢いで膨れ上がった資金が、本業の宇宙開発に投入されたのである。

流石、PHSやポケベルが現役な西暦1990年代の技術で、木星有人往還片道二年 因みに、俺の生きた現実では、その二十数年後打ち上げられた無人探査船が木星と火星の中間に到達するまでに四年かかっている とか、恒星間航行可能な超文明の技術を僅

カイパーベルト

か数年でリバースエンジニアリングしてのけたチート頭脳はワケが違う。

同じく天才に属するアベルやカインですら、この事実を知った時は若干引き気味だったくらいだ。

『この上高之橋博士あたり迄居たら、この世界はどうなっていた事やら……』

調査で判明されているGGG世界の人間は、現時点で獅子王兄弟と麗雄の妻、絆のただの三人。

獅子王両博士と同じ十大頭脳の高之橋博士はこの世界には存在せず、ガガガにおいて女好きで知られていた雷牙博士の女性遍歴&子沢山は相変わらずなのだけれど、その中にベターマンの主要登場人物である、アカマツ社長、阿嘉松滋氏は存在しないようだ。

つまりは、獅子王凱を生み出す両親の遺伝子と人格を産み出すのに最低限必要な人間だけがこの世界に挿入され、それ以外は出来る限りこの世界の人間だけで賄われていると言う事か？

『麗雄博士が晩婚だったのは、身近に女好きな雷牙博士が居た反動だろうしな……』

……とまあ、そんな性格分析は兎も角、諜報班の報告資料を見た感じ、獅子王兄弟による技術的蹂躪を除けば、俺が生きていた2010年代とさほど変わらない世界のようなので、どこか世界の果てから侵略者が現れたり、木星でジュピロスが連続遭難を起こしたり、どこぞの石窟寺院からアムスの花が発見されて妙な実験が始まったりしなければ、少なくとも今後数年は足場固めに専心出来そうだ。

『だが問題は、麗雄博士の知名度か……』

獅子王麗雄博士は、そこらの有名人なんぞ裸足で逃げ出すような名士中の名士である。

想像してみれば良い、日本一の天才科学者であり、多数の特許から天文学的な金の金を稼いでいるが、その多くを宇宙開発に継ぎ込んで自分は大きく裕福でもない生活を送っている。

そんな聖人みたいな人間が世界初の木星往還を成功させ、しかも、キャラクターがアレなのだ。

対談番組で、自慢の発明品を持ってきてくれと頼まれ、自動昆布茶入れ機とジェットローラー　その名の通りの、ジェット噴射付きのローラースケートだ　を持ち込み、司会と対談相手を啞然とさせたエピソードは様々な場で大変な人気を博し、それは後に、なにがどう化学変化を起こしたのか、ジェットローラーの麗雄博士とジェットスケートボードの雷牙博士が二人、見事なトリックを決めながらグラウンドキャニオンを空中横断する動画が当人達の手により某動画投稿サイトにアップされるに至って磐石の物となったそうである。

なおその後、ローラーと比べ比較的シンプル且つ余裕ある構造をしているジェットボードは、とある大手企業により幾つかの安全装置をつけた上で販売開始、今ではそれなりの競技人口を持つようになっているらしい。

尤も、コストやらジェットの出力的に、オリジナルの様な冒険飛行は不可能な上に、対象も大人限定の高価な遊具のようではあるが……。

『しかしこれは……エウレカセブンかいな』

プロボーダーが余暇中に空中飛行を楽しむ動画を眺め、俺が詠嘆とも嘆息ともつかぬ息を吐くと、そんな俺の百面相に気を惹かれたのか、仏製竜神姉妹の物怖じしないピンク色の姉、光竜がチヨコチヨコと近寄ってきた。

「さつきから、なにを見ているんですか？」

「……姉さん、隊長はお仕事中です。」

邪魔してはいけませんよ」

因みに、勇者達みんなの俺への呼称は、今の所は『隊長』で落ち着いている。

この体が獅子王凱からの借り物だと、そう明言している俺をその名で呼ぶ事は感情的に憚られ、また、自分達の直接の統率者と言えば『隊長』であるとの彼らのイメージによりその呼び名に落ち着いたのだが、勇者たちにそう呼ばれるのはかなりこそばゆく、なにやら自然とこの呼称に負けないよう頑張らなければ…という気持ちが沸いてくるのが不思議だ。

『きっとアレだ、Gストーン……は、データでしかない今の彼らにはないか』

とすると、竜神兄妹の躯体は全てデュアルカインド 同種との共鳴により特殊なエネルギーを発生する超能力者 の遺伝子をベースとしているから、きっと凱の肉体もその素養を持っていて、現実をほぼ再現したこのシミュレーション内に、仮想的なデュアル・インパルスが発生しているのだろう。

『竜神達のメガノイドはニューロノイドにするのも面白いかもな……』

並列してそんなくだらない事を考えながら、俺は姉に苦言を呈する黒い妹・闇竜に、身振りで構わないと示すと手に持った資料に掛けていたマスクを外した。

個人に対する調査内容も含まれていた為、他者には見えないようマスキングを行っていたのだが、今閲覧している内容なら、見られたとしても問題はない。

「ボルフォッグたちの調査資料だよ。

差障りのないものは、図書館に入れるけど……」

外の情報と言う言葉に目を輝かせる光竜と、姉ほど無邪気にはなれず、しかし、興味津々と言った体でこちらを見守っている闇竜……猫可愛がりする兄達の影響か、毛筋ほども拒絶されるとは考えていない姉とそんな姉の非礼をハラハラと見守りつつ自分も期待を捨てきれないその妹の姿に、俺は軽く眉根を押さえると、仮想空間を操作した。

「ウィー、キャン、フライー！じゃッ！！」

談話室の壁に大きな画面が開き、そこに竜神兄弟の視線が集まる。直後、そこに映し出されたのは、軽快なBGMに乗り大渓谷に飛び出す初老の二人の姿だった。

「雷牙博士、麗雄博士……？」

呆然と呟く氷竜 スクリーンの中走る二人の姿は、余りに特徴的で見紛い様もない。

瘦身で矮躯、どこか鳥を思わせる大きな頭を覆う髪は、鶏とハゲワシとをそれぞれ象る……

「兄ちゃん、幾らなんでも先走りすぎじゃぞ！」

「ハッハー、麗雄、悔しかったら追いついてみる！」

……そんな、国産ファンタジーに登場する小鬼めいた姿をした世界の
大頭脳が、童心を絵に描いたような満面の笑顔、身一つで虚空に躍り出た。

尖ったサングラス、モヒカンの頭を色鮮やかに染めた兄、雷牙が背負ったボードを中空で構え、その上に両足を乗せると、同時下部から放たれる噴流が、その体を瞬く間に空高く運び上げ、負けじ禿頭の弟がその両足に力を籠めると、履いていたローラーシューズの両脇からも白流が放たれる。

「「イーツ！ヤッホー！ツ！！」」

何も無い空中をハーフパイクに見立て、スケート、スノー、両ボードの妙技を披露する雷牙博士と、時には虚空を、時には巨岩を、それぞれ路面に見立て複雑なトリックスラロームを決める麗雄博士。二人が天に描く流麗そのものの軌跡を、ラジコン飛行機を改造したと思われる、数機のチェイサーが追いかけているのが見えた。

そして、大峡谷の狭間に描かれる、白い噴煙のシユプール。何らかの添加剤でも付与していたものか、何時までも白い姿を残す二つの軌跡は、やがて青い空に巨大なピースマークを描く。

最後に二人は、その軌道を交錯しながらハイタッチ、飛び出したのと反対側の崖に着陸すると、がっしりと互いの腕を組んだ。

「まだまだ若いモンには負けんぞい！」

「人間、諦めなければ空だって飛べるんじゃない！」

汗だくの姿で残る手を天に突き上げ、叫ぶ世紀の頭脳二人の姿は、彼らの背を追う者、責任ある立場にある者達が見れば卒倒モノの光景だったろう。

だが、その姿をそれ以上に爽快だった。

目の前に聳え立つ巨大な壁に、容易く風穴を穿つ規格外……今にも背を追いかけて走り出したくなるような、これをカリスマと言うのだろうか？

「すっごーい、あたしあれ欲しいーっ！」

「お、じゃあ俺が教えてやるよ」

「待つんだ、雷龍。」

もし着地が苦手な癖が、闇竜にうつったらどうする。
我々の体はもう、メカノイドではないんだぞ」

そして一瞬の空隙、妙技に魅せられた光竜がそう叫ぶと、空飛ぶ
機とでも言うべき形状の電磁荷台デンジャンホーに乗り空を飛ぶ龍神兄弟四男・雷
竜がそう答え、直後、三男の風龍が言葉を差し挟む。

「……確かに俺達も、着地の練習をしておく必要があるかもしれないな。
今までの感覚で居たら、下手すると摩り下ろされるぜ」

「隊長……」

最後に、炎竜、風竜がそう続け、俺はがつくりと頭を落とした。

まあ確かに、この仮想空間内で彼らがこうして活動しているのは、
新たな体に慣れるためであるし、ギャップを埋めるため、今の内に
着地の練習をと言う意見自体は間違っでは居ない。

現状外部活動時の移動手段は主にガンドーベルであり、それには
飛行の機能もあるのだ。

メカノイドの時の心算で降りて、勇者達が紅葉卸なんて事は考え

たくもない。

だが、だが、だが……だが、だ。

手を広げた自分が悪いと言う意見を否定する心算はないが、常日頃から助手として便利に使われ、休憩中にすらこうして報告書を読み今後の活動指針を考えなければならぬ羽目に陥った自分の前で、こうして寛いで娯楽に近い訓練の相談を持ちかけてくる竜神達が、正直……。

「解った」

そんな風に思いつつ、俺はその言葉を重い息と共に吐き出した。ジェットボードも、それを操るだっ広い空間も、共に設定・維持にはそう労力を要せず、この体の処理能力を圧迫するようなことはない。にも関わらず、一応の有用性を持つこの提案を拒否するのは狭量を通り越してただの意地悪の域だろう。

だからと、VR内に全高100m級のメカノイド（キングジェイダーやピアデケム・ピーク）が輪になってフォークダンスできる程度の空間と、そこに突き出す大型プラットフォームを設定し、ガンダーベルベースの多目的バイクと、ジェットスケートボードをそれぞれ数機、そこに設置した。

これなら、遊びと言うか、訓練と言うか、竜神達以外の目的にも仕えるだろう。

暇が出来たら俺もここで遊んでやる……そんな風に心に決めて、しかし俺ははたと気づいた。

『そう言えば、もう直ぐ竜神達もここを出て行くんだよね……』

彼らがこの姿で居る事で解る通り、躯体製作は既に大詰め……外部での受け入れ態勢も、この報告書と同時に届いた定時連絡では概ね整ったとの話であった。

次に自分に余裕ができるのは、恐らく竜神用躯体が完成し、彼らを外に出した後になるだろう。

そして、他に外部での下準備に適した面子は居ない為、次に何かを呼び出すのは恐らく、調査及びこの世界への浸透をある程度なした俺達が、何らかの大規模な外部施設を作るその時なのではないかと思われる。

となれば俺がここで誰かと遊ぶ機会などないわけで……。

『まあ、パルパレーパやペイ・ラ・カインと遊ぶなんて想像も付かないしな……。

パルス・アベルは……』

口元にうつすらと嬉しそうな微笑を湛え、『このロリコン！』と罵る彼女の姿がアリアリと脳裏に浮かび、俺は何故か口元に幽かな笑みを浮かべていた。

まあ、訓練が名目なら付き合ってはくれるのだろうが、事があの環境であの内容である。

何の特にもならない事柄を一々挙げ連ね、ネチネチと罵られる事は想像に難くなかった。

そう、例えばあの薄布一枚纏った貧相な体で、常に俺の上側を取るように移動し続け、そちらに目を向けた俺を『ロリコン』と罵るとか……。

『何でアイツは、俺をロリコンと罵ることにあんなに固執するんだか……』

……だがまあ、一人でするよりはずっとマシだろうか。

そんな機会があったらアイツも誘おう　そんな事を考えながら、俺はパチリと指を鳴らした。

その仕草に特に意味は無い、単なる気分だ。

だが、そのタイミングに合わせて解放されたエリアへの、入り口が広間に開く。

竜神シリーズ六人全員が、横並びになって通れそうな、両開きの大扉。

それを見た光竜が無邪気な歓声を上げ、そして次の瞬間。

「ありがとう、凱お兄ちゃん！」

俺は彼女に、思い切り抱きつかれた。

「……はい？」

状況が理解できずに、間抜けな声を上げる俺と、微妙に陰悪な視線をこちらに向けるお兄ちゃん四人衆……そして、姉の突然の奇行におろおろと戸惑う闇竜。

「ちょっと待って、光竜、とりあえずそのお兄ちゃんはどこから出てきた!？」

「だって、凱お兄ちゃんって、隊長って感じじゃないんだもん」

半瞬置いて我に返り、慌て彼女を引き剥がした俺に、光竜はあっけらかんとそう答えた。

彼女にとって隊長と言うか、戦闘その他の指揮を取る現場指揮官の基準は、オリジナルの獅子王凱や、その従姉、ルネ・カーディフ・獅子王であるわけで、それと比べて俺は確かに隊長っぽくは無い。

『けど、そもそも俺が隊長と呼ばれているのは単なる消去法で、そこに文句を付けられても……』

内心の渋面を困惑程度に抑え、何かを口にしようとした俺の、しかし光竜はそんな素振りには全く気付かず、更にこんな言葉を連ねた。

「それで何か似合う呼び名って無いかなんて思ってたら、ちょっと頼りないけど優しいし、お兄ちゃんなんてどうかって……」

聞いてみればまあ解らなくもない発想だが、できれば口にする前に、それがリアルお兄ちゃん達の逆鱗に触れかねない内容だと気付いて欲しい。

そんな事を願いながらおずおずと周囲を見渡すと、残る竜神兄弟は何か強い衝撃を受けたような表情でその腕を組んでいた。

「……流石は私達の妹です。」

その発想はありませんでした」

「確かに、世話になって目上の男性を兄貴って呼ぶのは、極普通の話だよな。」

護の奴も、凱隊長を『ガイ兄ちゃん』と呼んでいたし……」

『お前ら、妹の言う事なら何でもいいのか……』

或いは、俺はそれほどまでに彼らの中の『隊長』のイメージとかけ離れているというのか 恐らくは、その両方なのだろう、真面目に『兄貴』の呼び名を検討する氷竜、炎竜に、続けて風雷がこう口を開く。

「中国語でも、その呼び名は一般的です」

「一番上だから、凱大哥^{ダッグー}か、確かに俺たちは兄弟をそれぞれ名前で

呼んでいるし、ガイ隊長と呼ぶよりは抵抗は少ないな」

「では、ガイお兄様で決まりですね」

何か代案はないかと頭を働かせる俺の前、最後に闇竜がにっこり笑ってそう告げて、事の趨勢は決まった。

「そうだな、じゃあ、これからもよろしくな、兄貴！」

「ああ、ありがとよ、大哥！」

この訓練施設、有効に使わせてもらうぜ」

「じゃあ、凱お兄ちゃん、いつてきまーす」

そして、半ば呆然としている 別に、闇竜の『お兄様』に撃沈されていた訳ではない 間に、氷炎風雷光闇入り混じる大嵐は去り……最後に残された俺は、重い溜息を一つ吐くと、肩を落として研究室へと向かった。

「おや、何か良い事でもあったのですか、お兄様？」

……お前の入れ知恵か！

天才！天災？ 蹂躪される世界とお兄ちゃん？（後書き）

すっかり忘れていましたが、今日（2011年07月11日）に米国の無人探査船が四年かかってカイバールベルトの小惑星に到達予定……あの兄弟が産まれてしまった以上、転生先の世界がこうなるのは必然だと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4422s/>

白の星の誕生とその顛末について

2011年10月8日22時06分発行